

# 国立国会図書館蔵『平家物語剣之巻』解題・翻刻

総合研究大学院大学 先端学術院 日本文学研究コース 坂井 彪

## 解題

「剣巻」は、源氏に伝わる刀剣（鬚切・膝丸）と天皇家に伝わる三種の神器（神璽・神鏡・宝剣）の由来を語るテキストである。中世においては、屋代本『平家物語』別冊「平家剣巻」や百二十句本『平家物語』百七句「剣の巻上」・百八句「剣の巻下」（いずれも巻十二）のように『平家物語』に伴われる傍ら、長祿本『平家物語剣巻』のように単独のテキストとしても享受され、近世に入ると、版本（『太平記』等に収録されるものも含む）のほか、奈良絵本・絵巻も見られるようになる<sup>(1)</sup>。

近世期の「剣巻」が目を引くのは、挿絵を伴う諸本の存在であろう。絵入り版本、奈良絵本・絵巻がそれに当たる。しかし、「剣巻」の挿絵について論じられることはきわめて少なく<sup>(2)</sup>、挿絵を有する諸本の中でも唯一の絵巻である国立国会図書館蔵『平家物語剣之巻』（以下、国会本）はこれまでほとんど取り上げられることがなかった<sup>(3)</sup>。「剣巻」をいかにして絵巻に仕立て上げたのか、その本文（詞書）や挿絵はどのようなものであるか、これらを探ることは、近世における「剣巻」のありようを捉えられるのみならず、奈良絵本・絵巻研究、さらには版本を含めた絵入り本研究としても重要であるはずで、国会本は意義深い伝本と言えよう。そこで、本稿では解題と翻刻をもって国会本の紹介を行う。なお、本稿末には国会本の全挿絵及び関連の図版を掲載する。

まずは、「剣巻」の梗概を確認しておく。その内容は次のA～Pのトピックから成る（アルファベットはこの後も使用する）。

- A 刀剣札贅の序
- B 鬚切・膝丸の作成（満仲の代）
- C 頼光らによる鬼・蜘蛛退治（頼光の代）
- D 前九年の役・後三年の役（頼義・義家の代）
- E 二振りの分断（為義の代）
- F 保元の乱・平治の乱（義朝の代）
- G 治承・寿永の乱（頼朝の代）
- H 神璽の由来
- I 神代より伝わる霊剣
- J 素戔嗚尊の八岐大蛇退治
- K 神鏡の由来
- L 宝剣の移動と改鑄
- M 日本武尊の東征
- N 道行・生不動の宝剣盗難
- O 壇ノ浦の戦いで宝剣喪失
- P 頼朝のもとに揃う鬚切・膝丸（頼朝の代）

物語そのものは満仲の代に鬚切と膝丸が作られるところにはじまる(B)。以降、頼光、頼義、義家、為義、為朝、頼朝、それぞれの代のエピソードとともに、二振りが名前を変えながら受け継がれていく<sup>(4)</sup>。様子が語られ(C)G)、Gで壇ノ浦の戦いで宝剣喪失に話が及ぶと、話題は源氏及び源氏の刀剣から天皇家の三種の神器に切り替わる。その中でも特に宝剣に焦点を当てて、素戔嗚尊が八岐大蛇の尾から宝剣を取り出して以降、壇ノ浦の戦いで宝剣が失われるまでの来歴をたどった(H)O)後、再び源氏の話に戻り、満仲の代に作られた二振りが一度は分断するも、紆余曲折の末に頼朝のもとに揃ったことを寿いで物語は締めくくられる(P)。

「剣巻」の諸本は現在、以下のように分類されている<sup>(5)</sup>。

- 1 百二十句本(百二十句本『平家物語』巻十一)
- 2 屋代本(屋代本『平家物語』別冊)
- 3 田中本(近世初期の写本)<sup>(6)</sup>
- 4 長祿本(長祿四(一四六〇)年の奥書あり)
- 5 版本系諸本(『太平記』等に収録されるもの、奈良絵本・絵巻を含む)

諸本は、刀剣礼賛の序(A)の有無によって、すなわち、刀剣礼賛の序のない写本系諸本(1)4)と、刀剣礼賛の序を有する版本系諸本(5)に大別される。したがって、奈良絵本・絵巻のように、写本であっても刀剣礼賛の序から説き起こすものは版本系諸本に分類される。このほか、ほとんどの諸本が源氏刀剣由来譚(B)G)↓三種の神器由来譚(H)O)↓源氏刀剣由来譚(P)という構成を取る中で、百二十句本のみが異なっている点<sup>(7)</sup>、長祿本が独自の異文を有する点<sup>(8)</sup>をのぞけば、諸本間で大きな異同はない。

「剣巻」の梗概及び諸本について確認したところで、国会本の書誌を示す。

【所蔵者】 国立国会図書館

【整理書名】 『平家物語剣之巻』<sup>(9)</sup>

【請求番号】 WA 31-5

【数量】 三軸

【外題】 なし(表紙に金の題簽を貼付。第一軸と第二軸の題簽に文様が確認できないのは、保存状態による摩耗のためか)

〈第一軸〉 一五・七×三・九 cm、無地、砂子

〈第二軸〉 一五・七×三・九 cm、無地、銀

〈第三軸〉 一五・七×三・八 cm、七宝繋ぎ

【内題】 なし

【表紙】 金襴表紙、卍繋ぎに動物の丸(瑞雲)

【見返し】 〈第一軸〉 卍繋ぎ

〈第二軸〉 卍繋ぎ

〈第三軸〉 七宝繋ぎに竜の丸、鳳凰、向かい鶴

【料紙】 鳥の子(表だけでなく裏<sup>(10)</sup>にも下絵が施されている)

【寸法】 〈第一軸〉 三三・五×一四七・四 cm

〈第二軸〉 三一・九×一二九・二 cm

〈第三軸〉 三二・八×一五七・八 cm

※詳細は次ページの表1参照

【筆者】 『朝倉重賢』<sup>(11)</sup>

【書写年時】 『江戸前期』<sup>(12)</sup>

【備考】 第二軸第4紙末尾に別筆で「平義士書之平雅通トモ云」の書き入れあり。第10図は第二軸第16紙・第17紙の二紙

から成るが、間(〇・三 cm)からは二紙を継ぐ裏打ち紙

(二・〇 cm)が見えている。所蔵者印(各軸第1紙右上)及び

購入印(各軸第1紙右下)あり。箱入り(箱書き等なし)。

国会本の問題二点、錯簡と脱文を取り上げておこう。まずは錯簡について、それが認められるのは第9図(図9)である。複数の武士と女武者が描かれている当該挿絵は、G治承・寿永の乱(頼朝の代)の中にある。源平合戦で女武者と言えば、すぐに巴の存在が思い浮かぶが、Gには義経が義仲を討ついわゆる粟津の戦いの話も見えるため、この挿絵は粟津の戦いを絵画化したもので、女武者は巴、巴の横にるのが義仲、義仲

に對峙して刀を振り上げているのが義経だとわかる。しかし、挿絵の直前の詞書(第二軸第12紙)の内容は粟津の戦いのくだりではない。  
 ……二月三日源しはみやこをいて、一のたに、むかふくんひやうを  
 二手にわけてのりよし大しやうくんにて五万よきせつ津のくにより  
 をしよすうしろつめの大しやうくんよしつねみくさ山よりはつかう

表1 各料紙の寸法

	第1軸		第2軸		第3軸	
表紙		30.9cm		30.3cm		30.7cm
見返し		31.3cm		31.3cm		31.0cm
第1紙	詞	92.6cm	詞	93.3cm	詞	92.5cm
第2紙	詞	93.3cm	詞	92.2cm	詞	24.1cm
第3紙	絵1	45.7cm	詞	63.4cm	絵12	45.6cm
第4紙	詞	92.2cm	詞	42.9cm	詞	93.6cm
第5紙	詞	45.6cm	絵7	40.5cm	絵13	46.8cm
第6紙	絵2	46.0cm	詞	92.6cm	詞	92.1cm
第7紙	詞	92.3cm	詞	98.8cm	詞	24.8cm
第8紙	詞	68.0cm	絵8	46.1cm	絵14	94.3cm
第9紙	絵3	46.2cm	詞	92.5cm	詞	92.3cm
第10紙	詞	91.6cm	詞	12.2cm	詞	68.4cm
第11紙	詞	68.6cm	詞	89.6cm	絵15	46.7cm
第12紙	絵4	46.2cm	詞	24.1cm	詞	70.8cm
第13紙	詞	86.8cm	絵9	46.6cm	絵16	46.6cm
第14紙	詞	90.6cm	詞	92.9cm	詞	93.3cm
第15紙	絵5	47.0cm	詞	22.9cm	絵17	46.4cm
第16紙	詞	46.1cm	絵10	37.5cm	詞	92.7cm
第17紙	絵6	46.6cm	絵10	55.4cm	詞	93.6cm
第18紙	詞	92.3cm	詞	91.0cm	詞	46.4cm
第19紙	詞	92.1cm	詞	44.8cm	絵18	46.8cm
第20紙	詞	91.9cm	詞	23.9cm	詞	93.4cm
第21紙	詞	21.4cm	絵11	46.0cm	詞	93.5cm
第22紙			軸紙	15.7cm	詞	46.5cm
第23紙					絵19	46.4cm
第24紙					軸紙	18.7cm

す大手からめて同心に七日のうのときよりみのときにいたるまでさ  
ん／＼にた、かふ源しいくさにくちかつてへいけはかけまけおもひ  
／＼におちにけり平家の大将軍ちせむの三位みちもり以下八人ま  
てうたれにけり

挿絵の直前に記されるのは、同じく頼朝の代（G）のエピソードではあるものの、粟津の戦いではなく、一ノ谷の戦いのくだりなのである。粟津の戦いについては、第二軸第10紙に「けんりやくくはん年四月廿日みやこに入木そさまのかみをせめおとして大津のあはつにてくひをとる」とある。したがって、当該挿絵は第二軸第10紙の次にあるべきで、現状の位置は錯簡と見なせるのだ。奈良絵本・絵巻の場合、挿絵の直前の詞書は散らし書きとなることが多いが、第二軸第10紙の詞書も最後の行が散らし書きとなっており（傍線部）、このことから、第9図が第二軸第10紙の後に配されるべきものであることは間違いない。もっとも、巴は「剣巻」に登場せず、義経の郎党と思われる武士ら<sup>(13)</sup>についても同様である。それにもかかわらず義仲と義経以外の人物を描いているのは、義仲は巴、義経は弁慶をはじめとする郎等を伴うといった『平家物語』『義経記』等の関連テキストからの知識やイメージを取り込み、「剣巻」の叙述を超えて挿絵をつくり込もうとする国会本の姿勢の表れであろう。

続いて脱文に関して、国会本には詞書が七百字近く欠けている箇所が存在する。それは、第一軸第21紙から第二軸第1紙、すなわち、第一軸の末尾から第二軸の冒頭にかけての部分である（改行の前が第一軸第20・21紙、後が第二軸第1紙）。

……しらかはの院くまの御参詣のときこの山にはへつたうありやと御たつねありけるにいまたさふらはすと申ければいかてかさる事あ

るへきへつたうのきをたつねらるこ、にういとす、きたうと申は  
こんけんむまかたこくよりわうしやうへとひわたり玉ひしときさうの  
つはさとなりてわたりしものなりこれによつてくま野をはわかま、  
にくわんれうして又人なくそふるまひけるおりしもこんけんの御ま  
へにそなへてこもりたるやまふしをへつたうになすへきよしす、き  
はからひ申ければわか身そのきりやうふそくとてけうしんへつたう  
のはしめなり<sup>b)</sup>  
けうしんへつたうこのつるきをえてこれは源しちうたいのつるきな  
りけうしんかもつへきにあらすとてこんけんまいらせけり……

第一軸末尾は、熊野に別当がおらず、うい党鈴木党が傍若無人に振る舞っていたために、教真なる山伏が別当となる（E）、第二軸冒頭は、教真が得た剣を熊野権現に納める（E）という内容のだが、実は傍線部aと傍線部bの間に脱文がある。この部分を、無刊記版『太平記』所収の「剣巻」<sup>(14)</sup>から引用してみよう。

我身その器量不足とて教真別当のはじめなり。別当は重代すべきもの也。ひじりにてはかなふべからず。妻を合せよとて誰かは有べきと尋ぬるに。ためよしがむすめたつたはらの女房よかるべしとて。教真にぞ合せける。為義つたへ聞いていはく。為義がむこには。源平両家の間に弓箭にたづさはりて秀たらんものをこそと思ひつるに。諸事諸山の別当執行といふ事は。よきもありあしきもあり行徳群に抜けぬれば。さやうの官にも穢にもなるとこそきけ。行末もしらぬものに。をさへて合すらんこそ。ふしぎなれとて。音信不通し。不孝のむすめにてぞ有ける。しかも為義がつたへもちたる二のつるぎよもすがら吼ゆ。鬼切ほへたるこゑは。獅子の声に似たり。蜘蛛がほへたる声は。へびのななく、たり。かるがゆへに鬼丸をば。獅子

の子と改名し。蜘蛛をば。吼丸とぞ号しける。かゝる所に源平たて分て合戦あるべきよし聞けり。源平騒動なめならず。いかなる遠国深山のおくまでも。きかずといふ事なかりけり。教真別当これを聞て。我身は不孝の者なれ共。かゝらん時。ちからも合せてこそ。不孝もゆるさるべけれとて。常住の客僧山内の悪党等。上下をきらずもよほし立て。一万余きの勢にて。みやこに上りけり。人々これを見て。これはいかなる人やらん。和泉。紀伊国の間には。かやうの大名有へし共おぼえずとて。委くこれを尋ねれば。為義のむこ。熊野の別当教真也舅の方人のためにとて。上りたるよしひひければ。為義もこれを聞て。氏種姓はしらねども。かひぐしきもの成けり。いかなる人の一門ぞと尋ねれば。実方中将の末孫也と申ければ。さては為義が下すべき人にはあらざりけり。今まで対面せざりけるこそ。おをかなれとて。請じよせ。はじめて対面す。こゝろざしのあまりにや。重代一具のつるぎを取分て。吼丸をむこ引出物にぞしたりける。教真別当此つるぎを得て。これは源氏重代の剣也。教真がもつべきにあらずとて。権現にまいらせけり。

傍線部 c・d が国会本の傍線部 a・b に対応するが、教真が熊野別当になった（傍線部 a・c）後、本来であれば、教真が為義の娘を娶り、それを不快に思った為義が教真を勘当する↓二振りが夜な夜な鳴き声を発したため、その声から鬚切（鬼丸）を獅子の子、膝丸（蜘蛛切）を吼丸と改名する↓源平合戦の由を聞きつけた教真が為義のもとに参上した際、教真が実方中将の末孫であることがわかり、為義はこれまで勘当していたことを詫び、教真が刀を箱根に納めるくんだり（傍線部 b・d）へと続いていくのである。国会本にはない箇所は、無刊記版『太平記』では六七八字だが、奈良絵本・絵巻は漢字が少なく仮名が多いため、実

際には国会本はそれ以上の字数を欠いていることになろう。

傍線部 a・b ともに教真の話であるため、目移りによる誤写の可能性もなくはないだろうが、各軸の第1紙に注目してみると、第一軸（図20）と第三軸（図21）は料紙の右端から十六cmほどの位置から詞書を書きはじめているのに対し、第二軸（図22）は五cmほどの位置で、ほかの軸よりも右側（見返し側）から書きはじめている。さらに、各軸の第1紙と第2紙以降を見比べると、第一軸と第三軸の第1紙は山々を描いた風景画のような下絵である一方、第2紙（図23・24）以降は草花を描く。しかし、第二軸の第1紙は風景画ではなく、第2紙（図25）以降と同じような草花の下絵となっている。近世期に制作された奈良絵本・絵巻の各軸冒頭（第1紙）の下絵は、第2紙以降のそれに比べて華美であることが多い。その例に、朝倉重賢の奥書を有する国文学研究資料館蔵『羅生門物語』（図26・27）や、朝倉重賢筆と推定されている同館蔵『大黒舞』（<sup>15</sup> 図28・29）を見ても、やはり第1紙と第2紙以降とでは下絵が異なっている。

各軸冒頭の詞書の位置と下絵の問題から、第二軸の第1紙はもともと第1紙ではなく、先に引用した無刊記版『太平記』の傍線部 c・d の間の本文に相当する詞書の料紙が失われている可能性が高い。国会本の書誌はすでに示したが、第一軸と第三軸に比べて第二軸の全長が短いことから、料紙が抜き取られたと見てよいだろう。これは、国会本が原装でないことを意味する。となると、既述の錯簡とも関わってこよう。つまり、錯簡と脱文は改装に起因するものと考えられるのである。

ここまで、国会本の錯簡・脱文の問題を取り上げてきたが、挿絵を持つほかの諸本にも目を向けておきたい。挿絵を伴う「剣巻」には、国会本を含めて以下の七本が存在する。

「剣巻」単独で存在するもの

- ・ 承応二年版『つるきのまき』（国立国会図書館蔵。以下、丹緑本）
- ・ 奈良絵本『つるきのまき』（東京大学総合図書館蔵。以下、東大本）<sup>(16)</sup>

・ 『平家物語剣之巻』（国会本）

『太平記』に収録されるもの<sup>(17)</sup>

- ・ 無刊記版『太平記』（以下、無刊記版）
- ・ 元禄十年版『太平記』（以下、元禄十年版）
- ・ 元禄十一年版『太平記』（以下、元禄十一年版）
- ・ 奈良絵本『太平記』（永青文庫蔵（熊本大学附属図書館寄託）。以下、永青文庫本）<sup>(18)</sup>

各諸本がどの場面を絵画化しているかを比較してみよう。次ページの表2には、成立年時がわかるもの（丹緑本、無刊記版<sup>(19)</sup>、元禄十年版、元禄十一年版）を上から順に並べ、東大本は挿絵が似ている丹緑本<sup>(20)</sup>の下に、永青文庫本は『太平記』の最下段に、本稿で紹介する国会本は表全体の最下段に配置し、それぞれの諸本において何図に当たるのかを、通し番号で表記した。丸数字は二場面、二要素を描くもの（異時同図法もそうでない場合も含む）を意味し、表外下部の数字は、その挿絵を有する諸本の数を示す。

素戔鳴尊が八岐大蛇を退治する場面（J4）は、全諸本が挿絵を有しており、「剣巻」において最大の見せ場、山場であって、挿絵として欠かせないことが推測される。次いで、日本武尊が宝剣で草を薙ぎ払って難を逃れる場面（M3）が六本と多く、このほか、細工が頼光に刀を献上する場面（B4）、綱が鬼に襲われる場面（C6）、頼朝が刀を振り払って難を逃れる場面（F4）、手なづちと足なづちが稲田姫を囲う場面（J2）、道行なる新羅の僧が宝剣を盗む場面（N2）は、半分以上

の諸本が絵画化している。

挿絵の数は、計四十四図を数える無刊記版<sup>(21)</sup>が最多で、Hの途中からはじまる下巻のみ存の東大本<sup>(22)</sup>の計六図を下回る寛文十年版の計四図が最も少ない<sup>(23)</sup>。このような中で、十九図ある国会本は比較的挿絵の多い諸本と言えよう。その十九図のうち、表に明らかのように、第8図をのぞいたすべての挿絵が他本に確認できる。さらに、第1〜7、9、11〜16、18、19図の16図が永青文庫本と共通し、中でも第6、9、12、18図の4図は他本には見られず、永青文庫本とのみ共通する。そのうえ、国会本の第10・14図はほかの挿絵に比べて大きいのが、対応する永青文庫本の第16・20図も見開きの挿絵となっている<sup>(24)</sup>。永青文庫本は国会本と同じく朝倉重賢筆と推定されている<sup>(25)</sup>が、このように絵画化する場合も類似しており、両本の製作された場が近かったことを窺わせる。

対照表（表2）から、すなわち挿絵の有無という観点からわかる国会本の特徴を一つ述べておきたい。第15図（図15）と第17図（図17）はいずれも日本武尊が不破の関にて大蛇に遭遇する場面である。この大蛇は八岐大蛇の生まれ変わり、宝剣を奪還するべく日本武尊の行く手を阻むのだが、日本武尊は難なく飛び越える。しかし、再び不破の関を通る際、足が大蛇に触れ、それによって日本武尊は病に陥り、最終的に亡くなってしまう。これは、八岐大蛇の宝剣に対する執念の強さがよく表れている箇所、<sup>(26)</sup>「剣巻」のストーリーにおいてきわめて重要な要素の一つである。この不破の関のくだりは、挿絵の数が最も少ない元禄十年版以外のすべての諸本が絵画化しているが、無刊記版、永青文庫本は一回目（M1）のみ、丹緑本、東大本、元禄十一年版は二回目（M3）のみである中で、唯一国会本だけが一回目と二回目を描いている。他本の要素、つまり、一回目を描く諸本と二回目を描く諸本の双方の要素を取り込んだ結果と言えるかもしれないが、同時に、「剣巻」の物語上肝要な点を確実におさえ、それを挿絵に反映させたという見方もできよう。

表2 挿絵対照表

挿絵 種別	諸本		劔巻		無刊記版		元禄10年版		元禄11年版		水書文庫本		国会本	
	丹緑本	東大本	丹緑本	東大本	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
B1 鍛冶、刀を頼光に献上する														
B2 細工、八幡に祈誓する														
B3 細工、刀を作る														
B4 細工、刀を頼光に献上する														
C1 ある公卿の娘、嫉妬に苦しむ														
C2 ある公卿の娘、車輪に祈誓する														
C3 鬼、京の人々を襲う														
C4 綱、橋の爪で女房に会う														
C5 綱、女房を馬に乗せて行く														
C6 綱、鬼に襲われる														
C7 綱、鬼の手を頼光に献上する														
C8 綱の養母、綱を訪ねる														
C9 綱、養母と話を交わす														
C10 綱、養母に鬼の手を見せる														
C11 鬼、手を取り返す														
C12 頼光、法師に襲われる														
C13 四天王、頼光のもとにかけつける														
C14 四天王、蜘蛛を頼光に献上する														
C15 四天王、蜘蛛を河原にさらす														
D1 頼基、頼義に刀を明け渡す														
D2 宗任、和歌を詠む														
E1 為義、南部の衆徒を鎮圧する														
E2 山法師、狂歌を立てる														
E3 白河院、熊野に参詣する														
E4 教真、為義のもとに参上する														
E5 為義、教真と対面する														
F1 為義、義朝に膝丸を譲る														
F2 義朝、八幡の示現を受ける														
F3 義朝、頼朝と別れる														
F4 頼朝、刀で難を逃れる														
F5 忠致、義朝・朝長の言と刀を清盛に献上する														
F6 頼朝、庄司に刀を預ける														
F7 頼朝、伊豆に流される														
G1 頼朝、熱田に参詣する														
G2 義経、鞍馬で修行する														
G3 義経、鎌倉に下る														
G4 義経、頼朝に見参する														
G5 粟津の戦い														
G6 義経、熊野別当と対面する														
G7 一ノ谷の戦い														
G8 義経、梶原と逆櫓をめくり口論する														
G9 義経、逆櫓をつけて船を渡る														
G10 義経、三種の神器を持ち帰る														
H1 一女三男														
H2 天照大神、第六天魔王と誓約を交わす														
J1 家の門														
J2 手なづち・足なづち、稲田姫を囲う														
J3 素戔嗚尊ら、八岐大蛇退治の準備をする														
J4 素戔嗚尊、八岐大蛇を退治する														
J5 素戔嗚尊、引出物の鏡を授かる														
M1 日本武尊、不破の岡で大蛇を踏み越える														
M2 日本武尊、岩戸姫と取りを競ぶ														
M3 日本武尊、宝剣で難を逃れる														
M4 日本武尊、不破の岡で大蛇に触れる														
M5 日本武尊が水石を投げたところに水が流れる														
M6 日本武尊、醒ヶ井で体を冷ます														
M7 日本武尊、岩戸姫との再会する														
M8 白鳥、白幡を落とす														
N1 新羅の帝、連行に宝剣の盗難を命じる														
N2 連行、宝剣を盗む														
N3 宝剣、もとの宝殿に戻る														
N4 生不動、熱田に殺される														
O1 義経、箱根に刀を納める														
O2 土佐坊、処刑される														
O3 義経、西海へ落ちる														
O4 豊我兄弟、仇を討つ														
O5 頼朝のもとに一振りか揃う														
計	13	6	13	6	44	4	8	25	19	19	19	19	19	19

対照表はあくまでも、どの場面を絵画化しているのかを整理したものであるため、本解題や対照表を足がかりとして、図様の詳細な比較や、それによって国会本の挿絵が他本からの影響を受けているかどうかの検討を進め、さらには、「劔巻」のみならず『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』をはじめとする関連テキストの絵入り本をも視野に入れた研究を

行っていくつもりである。また、近年では版本系諸本の本文研究の必要性が述べられているところ<sup>(2)</sup>だが、挿絵だけでなく本文についても比較検討し、国会本の成立事情、ひいては近世における「劔巻」の享受の様相を明らかにしていきたい。

使用テキスト (DOIが付与されている場合は、それを併記した)

- ・国会本＝国立国会図書館デジタルコレクション (URL:https://dl.ndl.go.jp/pid/2533225 DOI:https://doi.org/10.11501/2533225)
- ・東大本＝東京大学デジタルアーカイブポータル (URL:https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/a5984e84-1da8-6d35-286a-a45964d059e3)
- ・無刊記版＝九州大学附属図書館広瀬文庫蔵。九大コレクション (URL:https://hdl.handle.net/2324/411104)
- ・元禄十年版＝お茶の水女子大学附属図書館蔵。国書データベース (URL:https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100238610/)
- ・『羅生門物語』＝国書データベース (URL:https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200003096/ DOI:https://doi.org/10.20730/200003096)
- ・『大黒舞』＝国書データベース (URL:https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200006198/ DOI:https://doi.org/10.20730/200006198)

※傍線等は筆者による。翻刻・引用の際には、旧字体や異体字を通行の字体に改めた。

### 注

- (1) このように、「剣巻」はテキストに伴われる場合と一つのテキストとして独立している場合があり、これらを総称するべく、『剣巻』ではなく「剣巻」と表記する。
- (2) 「剣巻」の挿絵を扱った数少ない先行研究に、山本岳史「寛文五年版『源平盛衰記』と絵入無刊記整版『太平記』の挿絵―四十四「三種宝剣」と『太平記』「剣巻」の挿絵の転用をめぐる―」(松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院 二〇一五)がある。
- (3) 「剣巻」諸本の分類に関する先行研究には、松尾葦江「平家物語剣巻 解説」(市古貞次校注・訳『平家物語(四)』小学館 一九八七)、「『剣巻』の意味するもの」(『日本古典文学会会報』112

- 一九八七)、神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典』「平家剣巻」項(勉誠出版 二〇〇二 小秋元段項目執筆)、大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大事典』「剣の巻」項(東京書籍 二〇一〇 鈴木彰項目執筆)、鶴巻由美「『剣巻』小考―諸本の分類と『保元物語』との連関―」(延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 別巻』汲古書院 二〇一一)等があるが、国会本を立項するのは『平家物語大事典』のみ。諸本分類に関する先行研究以外では、石川透『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店 二〇〇三)、筒井早苗『「かなわ」(岩瀬文庫「絵ものがたりファンタジアⅡ」プロジェクトチーム編『越境する絵ものがたり』(二〇一六)に国会本への言及がある。
- (4) 本稿では基本的に「鬚切」「膝丸」の名称を使用する。
- (5) 注(3)参照。なお、本稿に記した1〜5の分類及び配列は『平家物語大事典』によった。
- (6) 高橋貞一「田中本平家剣巻解説」(『国語国文』36(7) 一九六七)参照。塩釜神社本、菅文庫本も田中本と同系統。菅文庫本については、馬目泰宏「平家物語剣巻考その一―翻刻菅文庫平家剣巻―」(『新泉―研究篇―』17 一九九三)参照。
- (7) 百二十句本は、源氏の刀剣の由来を第百七句「剣の巻上」、三種の神器の由来を第百八句「剣の巻下」で語る。さらに、Hの一部とKは第百九句「鏡の沙汰」に見られる。
- (8) 長緑本の独自の異文は次のとおり。  
・サレバ神ノ御託宣ニモ、  
アサクマヤシホヒノイシニアラハレテミセシカミミノカゲ  
ナワスレソ(K)  
・三代将軍ノ代ツキテ後、ヒゲ切ハ上野ノ新田ノ家ニ伝リ、薄緑ハ  
足利ノ家ニ伝ルトゾ申ケル。(P)
- (9) 国立国会図書館サーチ及び国立国会図書館デジタルコレクションによる。ただし、鶴巻氏は写本系諸本と版本系諸本の違いは題にも表れるとし、「平家剣巻」や「平家物語剣巻」というように、「平家」あるいは「平家物語」を冠するのは写本系諸本の特徴だと指摘される。注(3)論文参照。なお、『平家物語剣之巻』の書名がついた経緯は不詳とのこと、そのほか、当該資料に関する記載は『帝国図書

館和漢図書名目録』にはないものの、『帝国図書館報』(18(4)一九二六)の雑録「江戸時代東海旅行図書絵画展覧会目録(其二)」にはあることを国立国会図書館よりご教示賜った。

(10) 第一軸の裏打ち紙の一枚目をはかってみたところ、九二・五cmであった。石川注(3) 著書参照。

(11) 国立国会図書館サーチ及び国立国会図書館デジタルコレクションでは江戸中期の成立と推定されるが、重賢筆との説を受け、ここでは江戸前期とした。重賢については石川注(3) 著書参照。

(12) 頭を刺っており、長刀を持っているのは弁慶だと思われる。そのほかの二人に関しては、義経の郎等であれば、佐藤継信、佐藤忠信、伊勢義盛等が考えられようか。

(13) 国会本と同じく奈良絵本・絵巻であり、朝倉重賢筆と推定され、「剣巻」を収録する永青文庫蔵(熊本大学附属図書館寄託)奈良絵本『太平記』(以下、永青文庫本)の本文は、無刊記版『太平記』に基づいているとされる(石川透「太平記絵巻・絵本の制作」(『軍記と語り物』36 二〇〇〇) ↓注(3) 著書、森田貴之「解説」(中根千絵・森田貴之編『奈良絵本『太平記』の世界―永青文庫所蔵『絵入太平記』全挿絵影印ならびに研究【研究篇】】勉誠社 二〇二二) 参照。後にも述べるが、国会本は永青文庫本の「剣巻」との関係性が窺えるうえ、詳細な調査が必要ではあるものの、国会本も無刊記版『太平記』の本文にある程度近いと見てよさそうであるため、ここでは無刊記版『太平記』を使用した。

(14) 石川注(3) 著書参照。

(15) 下巻のみ存(所蔵者による整理書名は「つるぎのまき 二巻(存一卷)」(東京大学OPAC及び東京大学デジタルアーカイブポータルによる)で、帙の題簽には「つるぎの巻 下巻」の記載あり)で、Hの途中からはじまる。

(16) 『太平記』の版本については、武田昌憲「『太平記』整版本―刊記本と絵入本、重量、厚さ等についての覚え書き」(『茨城女子短期大学紀要』18 一九九一)、日東寺慶治「『太平記』整版の研究」(長谷川端編『太平記とその周辺』新典社 一九九四)、小秋元段「国文学研究資料館蔵『太平記』および関連書マイクロ・デジタル資料書誌解題稿」(『調査研究報告』26 二〇〇五) ↓『太平記新考』(汲古

書院 二〇二四) 等参照。なお、『太平記大全』や『太平記絵巻』も挿絵を持つテキストだが、前者には「剣巻」の部分に挿絵がなく、後者にはそもそも「剣巻」が収録されない。

(17) 永青文庫本についてはすでに注(13)で触れたが、該本の挿絵の図版は中根千絵・森田貴之編『奈良絵本『太平記』の世界―永青文庫所蔵『絵入太平記』全挿絵影印ならびに研究【影印篇】』(勉誠社 二〇二二)に掲載されている。

(18) 無刊記版『太平記』について、小秋元氏は「寛文九年成立と言われる『書籍覚書』(書誌学別報別冊9所収)に『太平記<sup>ヒラガナ</sup>』と見えることから寛文頃の改版と認めてよい」と述べられている(注(16)論文及び著書)。さらに、山本氏は寛文五年版『源平盛衰記』の挿絵に無刊記版『太平記』の流用が認められるとし、無刊記版『太平記』は寛文五年以前の版だと論じられている(注(2)論文)。したがって、無刊記版は承応二年版の丹緑本より後、元禄十年版及び元禄十一年版よりは前に位置する。

(19) 松尾注(3) 参照。

(20) 森田氏は注(13) 著書の中で、無刊記版、元禄十年版、元禄十一年版、永青文庫本の挿絵について説明されるが(『太平記』梗概 附『絵入太平記』挿絵簡注)、対照表の作成にあたってはこれを参考とさせていただいた。ところで、氏は無刊記版の第20・24・41図を次のように解釈し、第21紙と41紙を錯簡と見なされた。以下、氏が推定される順に列挙する。なお、挿絵の説明は物語の梗概に沿ってなされるため、ここでは氏の解釈を私にまとめた。

- 第20図：保元の乱に敗れた為義が出家し、義朝に降参する場面
- 第41図：義朝が為義を処刑する場面
- 第22図：義朝が頼朝に友切(鬚切)を佩かせる場面
- 第23図：義朝が八幡の示現を受ける場面
- 第21図：義朝と朝長の首と刀が平家の見参に入れられる場面
- 第24図：頼朝が伊豆に流される場面

第21図はたしかに義朝と朝長の首と刀が清盛に献上される場面の間違いないが、しかし、対照表に示したように、第20図は為義が教真と対面する場面、第22図は頼朝が庄司に刀を預ける場面、第23図は頼朝が伊豆に流される場面、第24図は義経、鎌倉に下る場面、第

41図は土佐坊が処刑される場面なのである。したがって、第21図は第20図と第22図の間に、第41図は第40図と第42図の間に位置し、無刊記版の挿絵に錯簡は認められない。

(22)

東大本の第1図の直前の詞書は「太神まわうにあいたまひてのたまはくしかるへくは日本国をゆつりのま、にゆるしたまはゞふつほうをもひろめすまたそうほうをもちかつけしとのおほせならはとくくたてまつるとて」(傍線部は散らし書き)、直後の詞書は「日ほんをはしめてゆるしあるへしとき手しるしにとてをしてをたてまつりけりいまの神しとはこれなり」で、対照表にも示したとおり、この挿絵は天照大神が第六天魔王と誓約を交わすところの絵画化したものであるはずだ。しかし、実際には男が二人と異形が描かれている(図30)。原本を調査して挿絵の裏面を確認すると、第1図(図31)の裏面には「るきのまき下」「中」を抹消したうえで「下」と記す。「つ」は見切れている)とあるのに対し、第2図から第6図の裏面(図33・35・37・39・41)は「つるまき下」「一六」(いずれも、第1図と同様に「中」を抹消して「下」とするか、「中」の上に「下」を重ねて書く)とあり、「の」(傍点部)を入れるという点で第1図は第2図(図32・34・36・38・40・42)以降と異なる。さらに、第1図は「まんちう四」を抹消しており、「剣巻」本来の挿絵ではなく、『満仲』の挿絵を流用したものと思われる。また、第2図以降は料紙の下端下端に霞を描くが、第1図はそうではないという違いがある。このほか、第1図は松を丁寧に描くが、第2図以降は植物を丁寧に描かない、第1図には金泥が使われるが、第2図以降は金泥ではなく銀泥を使用するといった相違も見られた。問題はこれらのみならず、裏書き的には「剣巻」の絵とされる第2図も何を表したものが不明である。東大本については、今後さらに調査を進める必要がある。

(23)

元禄十年版の第二図(図42)では、綱が養母に鬼の手を見せるところ(右)と、鬼が手を取り返し、それを綱が追うところ(左)の二場面を異時同図法を用いて表現している。また、第三図(図43)では、頼朝が居眠りしたために義朝と離ればなれになるところ(左上)、道中で襲われた際に刀を振り払って難を逃れるところ(左下)の二場面を描く。このように、元禄十年版は挿絵が少ないながら、少しでも多くの場面を絵画化しようとする意識が窺える。

(24) 国会本の挿絵の寸法については表1参照。永青文庫本は、第16・20図のほか、第8・10図が見開きとなっている。

(25) 注(14)参照。

(26) 「剣巻」には、壇ノ浦の戦いで宝剣が失われたことを合理化・正当化しようとする志向性があり、不破の関に現れた大蛇をはじめとする八岐大蛇の生まれ変わりの存在が、宝剣喪失の合理化・正当化を導くプロットとして機能することは、拙稿『平家物語』「剣」の志向性―中世日本紀の側面として―(『愛文』57 二〇二二)で述べた。

(27) 鶴巻由美・阿部昌子「翻刻・校異」駒澤大学図書館蔵 沼沢文庫『剣巻』翻刻と版本『剣巻』の特徴(『駒澤大学仏教文学研究』26 二〇二三)、鶴巻注(3) 論文参照。

### 付記

貴重な資料の閲覧をご許可くださいました国立国会図書館、東京大学総合図書館、画像の利用をご許可くださいましたお茶の水女子大学附属図書館はじめ、諸機関に厚く御礼申し上げます。

### 凡例

- ・ 上段には原文を忠実に翻刻し、下段には積文を示した。
- ・ 行取りや和歌の二字下げは底本のままとした。
- ・ 旧字体・異体字は通行の字体に改めた。
- ・ 明らかな脱字脱文は無刊記版『太平記』により( )で括って原文に補った。積文には( )を付さなかった。比較的長い脱文はスペースの都合上、原文及び積文の当該箇所(※)を付し、翻刻の末尾(八三頁)に記した。
- ・ 誤字と思われる箇所は、その字の右側に傍記して訂正した。
- ・ 衍字は右側にママと傍記した。
- ・ 紙数は当該部分の末尾(第1紙)、挿絵は【第1図】のように示した。
- ・ 積文は読みやすさのために適宜漢字を当て、濁点、句読点、かぎかっ

こを補ったが、仮名遣い等は原文どおりとした。  
・原則的には原文の行取りにしたがったが、散らし書きの部分は追いついで示した。

・積文には[A]のようにトピックのアルファベットを示した。  
・別筆の書き入れ(第二軸第4紙末尾)は積文には示さなかった。

## 翻刻

原文

〈第一軸〉

はいこうはきはうかしよくろうを  
つたへてはくしやのれいをきつて天  
ていのなをいてんことをえたりしくわ  
うはけいかのひしゆをとつてゑんし  
のめいをたつて聖明のうんをいてん  
事をまつたうすをよそはくほう  
くはうえつのとく弓馬矢石のいき  
ほひ五戈のはかりこと四義のしな  
みなこれくわにをおさむるのしゆつ  
くらゐをたもつ(の)もといなりもつとも  
しやうくわんせらるへきものはとうけん  
のたくひなりそもく日本におほ  
くつるきありいはゆるほうけんとか  
のけんひけきりひさ丸こからすなり  
ひけきりひさまると申すふたつの  
つるきのゆらいをたつぬれば百わう

積文

[A]沛公は貴坊が属鏤を  
伝へて、白蛇の霊を切つて、天  
帝の名を出でんことを得たり。始皇  
は荆軻の匕首を取つて、燕使  
の命を断つて、聖明の運を出でん  
事を全うす。凡そ白旄  
黄鉞の徳、弓馬矢石の勢、  
五戈の計、四義の品、  
皆これ国を治むるの術、  
位を保つる基なり。尤も  
賞翫せらるべきものは、刀劍  
の類なり。[B]そもそも日本に多  
く劍あり。所謂、宝劍、十柄  
劍、鬚切、膝丸、小烏なり。  
鬚切、膝丸と申す二つの  
劍の由来を尋ぬれば、百王

五十六代のみかとをはせいわ天王  
とぞ申けるわうしあまたまします  
なかにも第六のわうしをはさた  
すみのしんわう御子つねもと六  
そんわうそのちやくし多田の満  
仲かうつけのかみはしめてけんし  
のしやうを給ひ天下をしゆこすへ  
きよしのちよくせんをそかうふりて  
まんちうのたまひけるはてんかをま  
もるへきものはよきたちをもたては  
いか、せんとてくろかねをあつめかち  
をめしたちをつくらせて見たまふに  
心につく太刀なかりけりいか、すへきと  
おもはれけるところにあるもの申やう  
ちくせんのくにみかさのこほりつち

## (第1紙)

山といふところにこそあてうよりく  
ろかねのさいくわたつてすねんさ  
ふらふと申ければすなはちかれを  
みやこにめしのほせたちをおほく  
つくらせて見給へともひとつも心  
につかすむなしくたるへきにて  
ありけるかかのかちおもひけるやう  
はわれつくしよりはるぐとめさるゝ  
かひもなくまかりくたりなはさいく  
の名をうしなはんこそ心うけれむか

五十六代の帝をば清和天王  
とぞ申ける。王子あまたまします。  
中にも第六の王子をば貞  
純親王、御子経基六  
孫王、その嫡子多田満  
仲上野守、はじめて源氏  
の姓を給ひ、天下を守護すべ  
き由の勅宣をぞ蒙りて、  
満仲宣ひけるは、「天下を守  
るべき者は、よき太刀を持たでは  
いかゞせん」とて、鉄を集め鍛冶  
を召し、太刀を作らせて見給ふに、  
心につく太刀なかりけり。いかゞすべきと  
思はれけるところに、ある者申やう、  
「筑前国三笠郡土

山といふところにこそ、異朝より鉄  
の細工渡つて数年候  
ふ」と申ければ、すなはち彼を  
都に召し上せ、太刀を多く  
作らせて見給へども、一つも心  
につかず。むなしく下るべきにて  
ありけるが、かの鍛冶の思ひけるやう  
は、「我筑紫よりはるぐ」と召さるゝ、  
甲斐もなく罷り下りなば、細工  
の名を失はんこそ心憂けれ。昔

しよりいまにいたるまで仏神に申  
事のかなへはこそきたうといふこ  
ともあるらめとて八まん宮にまう  
てつゝきみやうちやうらい八まん大ほ  
さつねかはくは心になふつるきつ  
くりいたさせてあたへ給へさやうなら  
は大ほさつの御うつわものとまかり  
なるへきとくわんしよをまいらせてし  
しやう心にそいのりける七日にまんす  
る夜の御しけんにはくなんちか申  
ところふひんなりとくまかりいて、  
六十日のあひたくろかねをきたふ(て)  
つくれさい上のつるき二つあたふへ  
しとふんみやうに御むさうありける  
かさいくよろこひてしやとうをいて  
にけりそのち

よくかねをわかし

きたいえらひ

て

六十日に

つくり

たり

まこと

に

さい上の

つるき

二二

より今にいたるまで、仏神に申  
事の叶へばこそ、祈禱といふこ  
ともあるらめ」とて、八幡宮に詣  
でつゝ、「帰命頂礼八幡大菩  
薩、願はくは意に称ふ劍作  
り出させて与へ給へ。さやうなら  
ば大菩薩の御器者と罷り  
なるべき」と願書を参らせて至  
誠心にぞ祈りける。七日に満ず  
る夜の御示現にはく、「汝が申  
ところ不便なり。疾く罷り出で、  
六十日の間、鉄を鍛ふて  
作れ。最上の劍二つ与ふべ  
し」と分明に御夢想ありける  
が、細工喜びて社頭を出で  
にけり。その後よく金をわかし、鍛い選びて  
六十日に作りたり。まことに最上の劍二つ作  
り出す。長さ二尺七寸、かの漢の高祖の三尺  
の劍ともいひつべし。

つくり

いたす長さ

二しやく

七寸

かのかんの

かうその

三尺の

けんとも

いひつへ

し

(第2紙)

【第1図】

(第3紙)

まん中おほきによろこひて二のつる  
 きにてうさいのものをきらせて見  
 玉ふに一のつるきはひけをくはへて  
 きつてければひけきりとなつけたり  
 ひとつをはひさをくはへてきりければ  
 ひさ丸とぞかうしけるまん中ひけ  
 きりひさまる二のけんをもつて天  
 下をしゆこし給ひけるになひかぬ草  
 もなかりけりこのちやくしせつつの  
 かみらいくわうの代となりてふしき  
 さま／＼おほかりけり中にも一の  
 ふしきには天下に人おほくうする

満中大きに喜びて、二の剣  
 にて有罪の者を切らせて見  
 玉ふに、一の剣は鬚をくはへて  
 切つてければ、鬚切と名づけたり。  
 一つは膝をくはへて切りければ、  
 膝丸とぞ号しける。満中、鬚  
 切、膝丸二の剣をもつて天  
 下を守護し給ひけるに、靡かぬ草  
 もなかりけり。□この嫡子撰津  
 守頼光の代となりて、不思議  
 様々多かりけり。中にも一の  
 不思議には、天下に人多く失する

事ありし、てもうせすさしきにつら  
なつてあつまりゐたるなかにたつて  
も見えずかきけすやうにそうせに  
けるゆくすゑもしらすありところも  
きかすありければおそろしといふはか  
りなし上一人よりしも万民にいた  
るまでさはきおそる、事申にお  
よはすこれをくはしくたつぬれば  
さかの天わうのきようにあるく  
きやうのむすめあまりにしつとふか  
くしてきふねのやしろにまうてつ、  
七日こもりて申やうきみやうちやう  
らいきふねの大みやう神ねかはくは  
七日こもりたるしにはわれをいき  
なからきしんになしてたび玉へねたまし  
とおもひつる女をとりころさんとそいのり  
けるみやうしんあはれとやおほしけん  
まことに申ところふひんなりおに、  
なりたくはすかたをあらためて宇ちの  
河せにゆきて三七日ひたれとし  
けんある女房よろこひてみやこへ  
かへり人なきところにてたてこもりて  
たけなるかみをは五つにわけ五つ  
のつのにそつくりけるかほにはしゆを

(第4紙)

さし身にはたんをぬりかなわを

事あり。死しても失せず、座敷に連  
なつて集まりゐたる中に立つて  
も見えず、かき消すやうにぞ失せに  
ける。行く末も知らず、ありどころも  
聞かずありければ、おそろしといふばか  
りなし。上一人より下万民にいた  
るまで、騒ぎおそる、事申に及  
ばず。これを委しく尋ねぬれば、  
嵯峨天皇の御宇に、ある公  
卿の娘、あまりに嫉妬深  
くして、貴船の社に詣でつ、  
七日籠りて申やう「婦命頂  
礼貴船大明神、願はくは  
七日籠りたる験には、我を生き  
ながら鬼神になしてたび玉へ。妬まし  
と思ひつる女を取り殺さん」とぞ祈り  
ける。明神あはれと思しけん、  
「まことに申ところ不便なり。鬼に  
なりたくは、姿を改めて宇治の  
河瀬に行きて三七日浸れ」と示  
現ある。女房喜びて都へ  
帰り、人なきところに立て籠りて、  
長なる髪をば五つに分け、五つ  
の角にぞ作りける。顔には朱を

指し、身には丹を塗り、鉄輪を

いた、ひてみつのあしにはまつをと  
もしたいまつをこしらへて両ほうに  
火をつけてくちにくはへつ、夜更  
け人静まりてのちやまとおほちへ  
はしりいてみなみをさしてゆきけれ  
はかうへより五つの火もえあかりまゆ  
ふとくかねくろにておもてあかく身  
もあかけはさなからきしんのす  
かたにことならず

これを見る人

きも玉しゐを

うしなひ

たふれ

ふし

しせすと

いふ事

なかり

けり

(第5紙)

【第2図】

(第6紙)

かくのごとくして宇ちのかはせに  
ゆきて三七日ひたりければきふね  
のやしろのはからひにてまことのおに  
とぞなりにける宇治のはしひめと

いた、ひて、三つの足には松を灯  
し、松明をこしらへて両方に  
火をつけて口にくはへつ、夜更  
け人静まりて後、大和大路へ  
走り出で、南を指して行きけれ  
ば、頭より五つの火燃え上がり、眉  
太く、鉄漿黒にて、面赤く身  
も赤ければ、さながら鬼神の姿  
に異ならず。これを見る人、肝玉しゐを失ひ  
倒れ伏し、死せずといふ事なかりけり。

かくのごとくして、宇治の河瀬に  
行きて、三七日浸りければ、貴船  
の社の計らひにて、まことの鬼  
とぞなりにける。宇治の橋姫と

はこれなるへしさてねたましきとおもふ

女そのゆかりわれをすさふおとこの

しんる(い)きやうたい上下をももえらます

なんによをもきらはすおもふやうに

そとりうしなふおとこをとらんとては

女にへんし女をとらんとてはおとこに

へんして人をとる京中のきせん

さるのときよりとりのはしめにいた

るまで人をもとをさすもんこをと

ちてそ侍けるそのころせつつかみ

らいくわうの御うちにつなきんとき

さたみつすゑたけとて四天王を

そつかはれける中にもつなはそのす

い一なりむさしのくにのみたといふ

ところにてむまれたりければみたの

源二とぞ申ける一てう大宮なると

ころにらいくはういさ、かのようし

ありければつなをししやにつかは

さる夜ゐんにをよひければひけき

りをはかせ馬にのせてそつかはし

けるかしこにゆきてたつねもんたうし

てかへりけるに一てうほり川のもと

りはしをわたりけるときひかしのつめ

によはひはたちあまりと見えたる女

のはたへはゆきのことくにてすかたは

かすかなりけるかこうはるのうちき

せにまほりかけてはいたいの袖に

はこれなるべし。さて、妬ましきと思ふ

女、そのゆかり、我をすさぶ男の

親類境界上下をも選まず、

男女をも嫌はず、思ふやうに

ぞ取り失ふ。男を取らんとては

女にまじり、女を取らんとては男に

まじりて人を取る。京中の貴賤、

申の時より酉のはじめにいた

るまで、人をも通さず、門戸を閉

ぢてぞ侍ける。その頃、摂津守

頼光の御うちに、綱、公時

貞光、末武とて、四天王を

ぞ仕はれける。中にも綱はその随

一なり。武蔵国美田といふ

ところにて生まれたりければ、美田

源二とぞ申ける。一条大宮なると

ころに頼光いさ、かの用事

ありければ、綱を使者に遣は

さる。夜陰に及びければ、鬚切

を佩かせ、馬に乗せてぞ遣はし

ける。かしこに行きて尋ね、問答し

て帰りけるに、一条堀川の戻り

橋を渡りける時、東の爪

に齡二十余りと見えたる女

の、膚は雪のごとくにて、姿は

かすかなりけるが、紅梅の打着

に守り懸けて、佩帯の袖に

きやうもつて人もくせすた、ひとりみな  
みへむきてゆきけるつなははしのに  
しのつめをすきけるをはたくと  
た、きつ、いつちへおはするそわれらは  
五てうわたりに侍るしきりに夜ふけ

(第7紙)

ておそろしをくりて給ひなんやとな  
れくしげに申ければつなはいそき  
馬よりとひおり御むまにめされさふら  
へと申ければよろこはしくこそといふあ  
ひたにつなはちかくあゆみよつて女  
はうをかきいたひて馬にうちのせて  
ほり川のひかしのつめをみなみのかたへ  
ゆきけるにおほきまちへいま一二た  
むかほとうち出ぬとおもふところに  
此女はううしろへ見かへりて申けるは  
まことには五てうわたりにはさしたるよ  
うも候はぬわかすむところはみやこの  
ほかにてさふらふなりそれまでをく  
りて給ひなんやと申ければうけ給  
はり候ぬいつくまでもおはします所へ  
をくりまいらせさふらふへしといふを聞  
てやかていつくしかりしすかたをかへ  
ておそろしけなるおに、なつていさわ  
かゆくところは

あたこ山そと

経持つて、人も具せず、たゞ一人南  
へ向きて行きける。綱は橋の西  
の爪を過ぎけるを、はたくと  
叩きつ、  
「いづちへおはするぞ。我らは  
五条渡りに侍る。しきりに夜更け

ておそろし。送りて給ひなんや」とな  
れくしげに申ければ、綱は急ぎ  
馬より飛び下り、「御馬に召され候  
へ」と申ければ、「喜ばしくこそ」と言ふ間  
に、綱は近く歩み寄つて、女  
房をかき抱ひて馬にうち乗せて、  
堀川の東の爪を南の方へ  
行きけるに、正親町へ今一、二段  
がほどうち出ぬと思ふところに、  
此の女房後へ見返りて申けるは、  
「まことには五条渡りにはさしたる用  
も候はぬ。我が住むところは都の  
外にて候なり。それまで送  
りて給ひなんや」と申ければ、「うけ給  
はり候ぬ。いづくまでもおはします所へ  
送り参らせ候べし」と言ふを聞き  
て、やがていつくしかりし姿を変へ  
て、おそろしげなる鬼になつて、「いざ、我  
が行くところは愛宕山ぞ」と言ふまゝに、綱が髻を  
掴むで引つさげて、乾の方へぞ飛び行きける。

いふまゝに

つなか

もとゝ

り

を

つかむて

ひつさけて

いぬ

いのはうへ

そ

とひゆき

ける

(第8紙)

【第3図】

(第9紙)

つなはすこしもさはかすくたんのひけ  
きりをさつとぬきそらさまにおにか  
手をふつときるつなはきたのゝや  
しろのくわいらうの屋のうへにとう  
とおつおには手をきられなからあた  
こへそひかりゆくさてつなはくわいら  
うよりおとりおりてもとゝりにつき  
たるおにか手をとりてみれはゆき  
のかたちはひきかへてくろき事かき  
りなししらかひまなくおひしけりしろ

綱は少しも騒がず、件の鬚  
切をさつと抜き、空様に鬼が  
手をふつと切る。綱は北野の社  
の回廊の屋の上にごう  
と落つ。鬼は手を切られながら愛  
宕へぞ光り行く。さて、綱は回廊  
より踊り下りて、髻につき  
たる鬼が手を取りて見れば、雪  
の貌は引き変へて黒き事限  
りなし。白髪隙なく生ひしげり、銀

かねのはりをたてたるかごとくなり  
 これをもつてまいりたりければらく  
 わう大きにおとろき給ひふしきの（事）  
 なりと思ひ玉ひせいめいをめせとて  
 はりまのかみあへのせいめいをめして  
 いかゝあるへしととひければつなは七  
 日のいとまを給てつゝしむへしおに  
 か手をはよくくふうしをき玉ふへし  
 きたうには人わうきやうをかうとくせ  
 らるへしと申ければそのまゝにそおこ  
 なはれけるすてに六日と申ける  
 たそかれときにつなかしゆく所  
 のもんをたゝくいつくよりとたつねけ  
 れはつなかやうほわたなへにあり  
 けるかのほりたりとそこたへけるかの  
 やうほと申はつなかためにはをは  
 なり人していはくあしきやうに心得  
 たまふ事もやとてもんのきはまて  
 立いて、たまゝの御のほりにて候へ  
 とも七日のものいみにて候かけふは  
 六日になりぬあすはかりはいかな  
 る事候ともかなふましやとめされ  
 候へし明後日になりなはいれまいら  
 せ候へしと申ければ母これをきゝて  
 さめくとうちなきてちからをよは  
 すさふらふなりさりなからわとのを

（第10紙）

の針を立てたるがごとくなり。  
 これを持つて参りたりければ、頼光  
 大きに驚き給ひ、「不思議の事  
 なり」と思ひ玉ひ、「清明を召せ」とて、  
 播磨守安倍清明を召して、  
 「いかゝあるべし」と問ひければ、「綱は七  
 日の暇を給て慎むべし。鬼  
 が手をはよくく封じ置き玉ふべし。  
 祈祷には仁王経を講読せ  
 らるべし」と申ければ、そのまゝにぞ行  
 なはれける。すてに六日と申ける  
 たそがれ時に、綱が宿所  
 の門を叩く。「いづくより」と尋ねけ  
 れば、「綱が養母、渡辺にあり  
 けるが上りたり」とぞ答へける。かの  
 養母と申は、綱がためには伯母  
 なり。人していはく、「悪しきやうに心得  
 給ふ事もや」とて、門の際まで  
 立出で、「たまゝの御上りにて候へ  
 ども、七日の物忌みにて候が、今日は  
 六日になりぬ。明日ばかりはいかな  
 る事候とも叶ふまじ。宿を召され  
 候べし。明後日になりなば入れ参ら  
 せ候べし」と申ければ、母これを聞きて  
 さめくとうち泣きて、「力及ば  
 ず候なり。さりながら和殿を

母かうみおとし、よりうけとりてやしな  
ひそたてしこ、ろさしいかはかりとかおもふ  
らんよるとてもやすくいねもせずたま  
くぬるとてもぬれにしとこにわか身  
ふしかはけるとこにわたのを、き四つ  
や五つになるまではあらし風にもあて  
しとしていつかわか子のせい人して人  
にすぐれてよからんことをも見はやき  
かはやと思ひつ、よるひるねかひしかひ有  
てせつつかみとの、御うちにみたの  
源次といひつればかたをならふる人もな  
しかみにもしもにもほめられぬれば  
よるこひとのみこそおもひつれとひれう  
えんのみちなれはつねにのほる事  
もなしみえはやみはやとこひしとお  
もふこそおやこの中のなげきなれこ  
れほとうちつ、きゆめ見もあしく  
侍れはおほつかなくおもはれてわた  
なへよりのほりけれともものうち  
へもいれられすおやともおもはれぬわ  
か身の事こと

こひしく

おもふ事こそ

はかなけれ

(第11紙)

母が産み落とし、より受け取りて、養  
ひ育てし志、いかばかりとか思ふ  
らん。夜とても安く寝ねもせず、たま  
く濡るとても、濡れにしとこに我が身  
臥し、乾けるとこに和殿を置き、四つ  
や五つになるまでは荒き風にも当て  
じとして、いつか我が子の成人して人  
にすぐれてよからんことをも見はや聞  
かばやと思ひつ、夜昼願ひし甲斐有  
て、撰津守殿の御うちに美田  
源次と言ひつれば、肩を並ぶる人もな  
し。上にも下にもほめられぬれば、  
喜びとのみこそ思ひつれ。都鄙遼  
遠の道なれば、常に上る事  
もなし。見えばや見ばやと恋しと思  
ふこそ、親子の中のなげきなれ。こ  
れほどうち続き夢見も悪しく  
侍れば、おほつかなく思はれて、渡  
辺より上りけれども、門のうち  
へも入れられず、親とも思はれぬ我  
が身の、子と恋しく思ふ事こそはかなけれ」

## (第12紙)

つなはたうりにせめられてかとをひら  
 ひて入にけり母よろこひにてこしかた  
 ゆくすゑのものかたりしさて七日の物  
 いみといひつるはなに事にてありける  
 そととひければかくすへき事ならねは  
 ありのまゝにそかたりけるは、これを聞  
 さてはおもきつゝしみにてありける  
 そやさほどの事ともしらすうらみける  
 こそくやしけれさりなからおやはま  
 ほりにてありければへちの事はよも  
 あらしおにの手といふなるはいかなる  
 ものにてあるやらん見はやとこそ  
 申されけるつなこたへていはくやす  
 き事にてさふらへともかたくふうして  
 侍れば七日すきてはかなふまし明日  
 くれて候は、けんさんに入申へし母  
 のいはくよし／＼さては見すとでも  
 ことのかくへき事ならすわれはまた  
 このあかつきは夜をこめてくたるへし  
 とうらみかほに見えければふうしたり  
 つるおにの手をとりいたしやうほの  
 まへにそをきたりけるはなをも  
 うらみかほにてすこしうちそはみた  
 るふせいにてうちかへし／＼これを  
 見てあなおそろしやおにの手といふ

綱は道理に責められて、門を開  
 ひて入にけり。母喜びにて来し方  
 行く末の物語し、「さて、七日の物  
 忌みと言ひつるは何事にてありける  
 ぞ」と問ひければ、隠すべき事ならねば  
 ありのまゝにぞ語りける。母これを聞、  
 「さては重き慎みにてありける  
 ぞや。さほどの事とも知らず恨みける  
 こそ悔しけれ。さりながら親は守  
 りにてありければ、別の事はよも  
 あらじ。鬼の手といふなるはいかなる  
 ものにてあるやらん。見ばや」とこそ  
 申されける。綱答へていはく、「安  
 き事にて候へども、堅く封じて  
 侍れば、七日過ぎでは叶ふまじ。明日  
 暮れて候は、見参に入申べし」。母  
 のいはく、「よし／＼、さては見すとでも  
 ことの欠くべき事ならず。我はまた  
 この暁は夜を込めて下るべし」  
 と恨み顔に見えければ、封じたり  
 つる鬼の手を取り出し、養母の  
 前にぞ置きたりける。母なをも  
 恨み顔にて少しうちそばみた  
 る風情にて、うち返し／＼これを  
 見て「あなおそろしや。鬼の手といふ

ものはかゝるすさまじきものにて有けるやといひてさしをくやうにてたちさまにこれはわか手なればとるぞというまゝにおそろしげなるおにゝなりてそらにちあかりてはふのしたをけやふりて

くもをよけ

てそ

いりに

ける

(第13紙)

それよりしてわたなへたうのいゑをつくるにははふをうたすしてあつまやつくりにするとかやつなはおにゝ手をとるかへされて七日ののいみやふるといへとも仁わうきやうのちからによつてへちのしさいはなかりけりこのひけきりをはおにの手きつてのちおにまるとかいみやうすおなしきとしのなつのころらいくわうきやへいをしたいかにおとせともおちすのちにはまい日におこりけりしかるにおこりぬればかうへいたく身にしゃきいてゝてんにもつかす地にもつかすちうにうかれてなやまれけりかやうにひつはくする事は

ものは、かゝるすさまじきものにて有けるや」と言ひて、差し置くやうにて立ち様に「これは我が手なれば取るぞ」と言ふまゝに、おそろしげなる鬼になりて、空に上がりて破風の下を蹴破りて、雲をよけてぞ入りにける

それよりして渡辺党の家を作るには、破風を打たずして東屋作りになるとかや。綱は鬼に手を取り返されて、七日の物忌み破るといへども、仁王経の力によつて別の子細はなかりけり。この鬚切をば鬼の手切つて後、鬼丸と改名す。同じき年の夏の頃、頼光癪病を仕出し、いかに落とせども落ちず、後には毎日発りけり。しかるに発りぬれば、頭痛く身に邪氣出でて、天にもつかす地にもつかす、中に浮かれて惱まれけり。かやうに逼迫する事は

三十よ日にそおよひけるあるとき  
又大事にいのちもうするやうにお

こり上下玉しみをうしなふところ  
にしけんに見えさせ玉ふければ四天  
わうのものにもかんひやうたひく  
なればいつれもやすめんとてすこし引  
のきてやすみけりらくわうすこし夜  
ふけかたのことなればかすかなるともし  
火のかけよりたけ七しやくはかりなる  
ほうしするくくとあゆみよつてなわを  
もつてらくわうにつけんとすらくわ  
うこれにおとろひてかはおきな  
ものなればくわいくはうになわをはつ  
けんとするそにくきやつかなとて  
まくらにたてゝをかれたるひさまるを  
おつとりてはたときる四天わうとも  
きゝつけてわれもくとはしりより  
なに事にて候と申ければしかくくとそ  
のたまひける

(第14紙)

【第5図】

(第15紙)

とうたいの下を見ければちこほれ  
たり手に火をとほしてみればつま  
とよりすのこへちこほれけりこれを、

三十余日にぞ及びける。ある時  
又大事に命も失するやうに発

り、上下玉しみを失ふところに少  
し減に見えさせ玉ふければ、四天  
王の者にも看病度々なり  
ければ、いづれも休めんとて少し引  
のきて休みけり。頼光少し夜  
更け方のことなれば、かすかなる灯  
火の影より、長七尺ばかりなる  
法師するくくと歩み寄つて、繩を  
もつて頼光につけんとす。頼光  
これに驚ひてがはと起き、「何  
者なれば頼光に繩をばつ  
けんとするぞ。憎きやつかな」とて、  
枕に立てゝ置かれたる膝丸を  
おつ取りてはたと切る。四天王ども  
聞きつけて、我もくくと走り寄り、  
「何事にて候」と申ければ、「しかく」とぞ  
宣ひける。

灯台の下を見ければ、血こほれ  
たり。手に火を灯して見れば、妻  
戸より簀子へ血こほれけり。これを追

ひゆくほとにきた野のうしろに大  
なるつかありかのつかへ入たりければす  
なはちつかをほりくつしてみるほどに  
四しやくはかりなるやまくもにてそ有  
けるからめてまいりたりければらくはう  
やすからざる事かなこれほどのやつに  
たふらかされ三十余日かあひたなや  
まされけるこそふしきなれおほちに  
さらすへしとて

くろかねの

くしに

さし

かはら

に

たてゝそをき

に

ける

(第16紙)

【第6図】

(第17紙)

これよりひさまるをくもきり丸と  
そかうしけるらくはうの代よりて  
はのかみよりもとの手にわたる天き  
五年らくはうのおとゝかはちのかみ  
よりのふのちやくし伊よのかみらいき

ひ行くほどに、北野の後に大  
なる塚あり。かの塚へ入たりければ、す  
なはち塚を掘り崩して見るほどに、  
四尺ばかりなる山蜘蛛にてぞ有  
ける。搦めて参りたりければ、頼光  
「安からざる事かな。これほどのやつに  
たぶらかされ、三十余日が間悩  
まされけるこそ不思議なれ。大路に  
さらすべし」とて、鉄の串に刺し河原に立てゝぞ  
置きにける。

これより膝丸を蜘蛛切丸と  
ぞ号しける。D頼光の代より出  
羽守頼基の手に渡る。天喜  
五年、頼光の弟河内守  
頼信の嫡子伊予守頼義、

あふしうのちう人くりやかはの二郎阿への  
 のさたたうとりのうみの三郎おなしき  
 むねたうきやうたいむほんのよしそ  
 のきこえありければかのうちてにくた  
 さるゝときかねみちのくにかみに  
 なしけんしちうたいのつるきおに  
 きりまるくもきりまるよりもとかも  
 とにありけるをせんしにてめしいた  
 さるらいきのあそんに給はりてけり  
 よりもとのいはくこのつるきはそふた、  
 のまん中より三代そうてんのたから  
 なりちやくくさうせうのつるきにて  
 さふらへはいかてか身をばなし候へき  
 と申けれども御もちゐなければちから  
 をよはすいたしけりらいきこれを給て  
 あふしうに下かうし九か年かあひた  
 た、かひてつゐにいくさにうちかち  
 さたたうかくひをとりむねたうをは  
 いけとりて上らくすさたたうかたけ  
 九尺五寸むねたうははるかにおとり  
 て六尺四寸そありけるらいきのしゆ  
 くしよにありけるをけいしやううんかく  
 はきこしめしあつまのえひすさこそは  
 おかしく侍らめいさゆきて見んとて梅  
 花を一えたおりてむねたうこれは  
 いかにとひければむねたうとりあ  
 へず

奥州の住人栗屋河二郎阿部  
 の貞任、鳥海三郎、同じき  
 宗任兄弟謀反の由、そ  
 の聞こえありければ、かの討手に下  
 さるゝ時、兼陸奥国守に  
 なし、源氏重代の剣、鬼  
 切丸、蜘蛛切丸、頼基がも  
 とにありけるを宣旨にて召し出  
 さる。頼義朝臣に給はりてけり。  
 頼基のいはく、「この剣は祖父多田  
 満中より三代相伝の宝  
 なり。嫡々相承の剣にて  
 候へば、いかでか身をば離し候べき」  
 と申けれども、御用ゐなければ力  
 及ばず出しけり。頼義これを給て  
 奥州に下向し、九か年か間  
 戦ひて、つゐに戦にうち勝ち、  
 貞任が首を取り、宗任をば  
 生け捕りて上洛す。貞任が長  
 九尺五寸、宗任ははるかに劣り  
 て六尺四寸ぞありける。頼義の宿  
 所にありけるを、卿相雲客  
 は聞こし召し、「吾妻の夷、さこそは  
 おかしく侍らめ。いざ行きて見ん」とて、梅  
 花を一枝折りて、「宗任、これは  
 いかにと問ひければ、宗任とりあ  
 へず、

わかくにの梅の花とは見たれども

おほみや人はいかゝいふらん

と申たりければみなしらみてそかへりける  
さてむねたうはつくしへなかさされたり

(第18紙)

けり子そんはんしやうしていまにあり  
まつらたうとはこれなりおにまるくもき  
り二つのつるきをはらいきのあつそん  
よりちやくし八まん太郎よしいゑに  
ゆつりけりこゝにてはのくにせんほ  
くかなさはのしやうにたてこもりたる  
たけひらむほんのよしきこえければ  
こく中のらんけきをしつめんかため  
によしいゑはせむかふたけきつはもの  
なりければさうなくおちす三かねん  
にほろひにけりらいきの九か年の  
たゝかひとよしいゑの三年のいく  
さをあはせて十二年のかせんとは申  
なりいつれもつるきのとくによつて  
かたきをはとりてけりよしいゑ子  
ともおほくありけれともちやくし  
つしまのかみよしちかはいつものく  
にゝてむほんのきこえあるによつて  
いなはのかみまさもりをついたうしに  
くたされてかのくにゝてうたれぬ二  
男かはちのはんくはんよしたゝ三男しき

我が国の梅の花とは見たれども

大官人はいかゝ言ふらん

と申たりければ、みなしらみてぞ帰りける。  
さて、宗任は筑紫へ流されたり

けり。子孫繁昌して今にあり。  
松浦党とはこれなり。鬼丸、蜘蛛切、  
二つの剣をば頼義朝臣  
より嫡子八幡太郎義家に  
譲りけり。こゝに出羽国山北  
金沢の城に立て籠もりたる  
武衡謀反の由聞こえければ、  
国中の乱劇を鎮めんがため  
に義家馳せ向かふ。武き兵  
なりければ、左右なく落ちず、三か年  
に滅びにけり。頼義の九か年の  
戦ひと、義家の三年の戦  
をあはせて、十二年の合戦とは申  
なり。いづれも剣の徳によつて  
敵をば取りてけり。E義家子  
ども多くありけれども、嫡子  
対馬守義親は出雲国  
にて謀反の聞こえあるによつて、  
因幡守正盛を追討使に  
下されて、かの国にて討たれぬ。二  
男河内判官義忠、三男式部

ふのたゆうよしくにこれらにもゆ  
つらす四なん六てうのはんくはんため  
よしにゆつり玉ふ十四のとしをちみ  
の、かみよしはるむほんのよしふう  
ふんすためよしうつてにそむかひける  
よしはるはおいのためよしむかふと聞  
てもと、りきりかうをかふて上らく  
すこれもつるきのようとそおほえける  
又十八さいにてなんともしゆとてうか  
をうらみたてまつりてす万人の大  
せい京へせめのほりしをためよし十  
六きにてくりこ山にはせむかひ  
をひかへす同じくつるきのるとくとそ  
きこえけるその時山ほうし一首の歌  
をそたてたりける

ならほうしくりこ山にてしぶりきて

(第19紙)

いかもの、くをむきそとらる、  
とよみたりければならほうしやすからぬこ  
とにしていかにもこのこたへよみかへさん  
と立やすらふところにあはの上座と  
いふものにはかられて山ほうしきんこく  
せらる、なら法師くりこ山のこたへにそ  
よみたりける

ひゑほうしあはの上さにはかられて

きひしくこくにつかれらるかな

大輔義国、これらにも譲  
らず、四男六条判官為  
義に譲り玉ふ。十四の年、伯父美濃  
守義治謀反の由風  
聞す。為義討手にぞ向かひける。  
義治は甥の為義向かふと聞  
て髻切り、降を乞ふて上洛  
す。これも剣の用とぞ覚えける。  
又十八歳にて、南都の衆徒朝家  
を恨み奉りて数万人の大  
勢京へ攻め上りしを、為義十  
六騎にて栗子山に馳せ向かひ  
追ひ返す。同じく剣の威徳とぞ  
聞こえける。その時山法師一首の歌  
をぞ立てたりける。

奈良法師栗子山にてしぶりきて

いか物具をむきぞ取らる、  
と詠みたりければ、奈良法師安からぬこ  
とにして、いかにもこの答へ詠み返さん  
と立やすらふところに、阿波上座と  
いふ者に謀られて、山法師禁獄  
せらる。奈良法師栗子山の答へにぞ  
詠みたりける。

比叡法師阿波上座に謀られて

きびしく獄につがれらるかな

とそよみたりけるさてためよしは十四に  
ておちをいけとりせしけんしやうに  
さこんのしやうけん(※1)なざる廿八にて  
さへもん三十九にてけんひぬしにな  
ざるその、ちみちのくをそのみ申  
ければためよしかためにはふきつ也  
そふよりよしは九か年のかせんし親父  
よしいゑか三か年のいくさを(す)なをい  
しゆのこるくになりけりためよしく  
しになるは又くにのらうせき出来  
せんたこくを給はらんとおほせあり  
ければせんそのくにをたまはらすは  
すりやうしてもなにかせんとてつ  
ゐにしゆりやうせさりけりためよし  
ははらくに男女四十六人ありくま  
のにも女房ありむすめをはたつたは  
らの女房とぞ申けるしらかはの院くま  
の御さんけい(この山にはへつ  
たうありやと御たつねありけるにいま  
たさふらはすと申ければいかでかざる  
事あるへきへつたうのきをたつねらる  
こ、にういとうす、きたうと申はこんけ  
むまかたこくよりわうしやうへとひわ  
たり玉ひしときさうのつはさとなり  
てわたりしものなりこれによつて  
くま野をはわかま、にくわんれうし  
て又人なくそふるまひけるおりしも

とぞ詠みたりける。さて、為義は十四に  
て伯父を生け捕りにせし勸賞に  
左近将監に(※1)なざる。廿八にて  
左衛門、三十九にて檢非違使にな  
ざる。その後陸奥を望み申  
ければ「為義がためには不吉也。  
祖父頼義は九か年の合戦し、親父  
義家が三か年の戦をす。なを意  
趣残る国なりけり。為義国  
司になるは、又国の狼藉出来  
せん。他国を給はらんと仰せあり  
ければ、「先祖の国を給はらずは、  
受領しても何かせん」とて、つ  
ゐに受領せざりけり。為義  
は腹々に男女四十六人あり。熊  
野にも女房あり。娘をばたつた  
はらの女房とぞ申ける。白河の院、熊  
野御参詣の時、「この山には別  
当ありや」と御尋ねありけるに、「いま  
だ候はず」と申ければ、「いかでかざる  
事あるべき」。別当の機を尋ねらる。  
こ、にうい党、鈴木党と申は、権現  
摩伽陀国より王城へ飛び渡  
り玉ひし時、左右の翹となり  
て渡りし者なり。これによつて  
熊野をば我がま、に管領し  
て、又人なくぞ振る舞ひける。折しも

こんけんの御まへにそなへてこもり

(第20紙)

たるやまふしをへつたうになすへき  
よしすゝきはからひ申ければわか身  
そのきりやう

ふそくとて

けうしん

へつたうの

はしめなり

(第21紙)

〈第二軸〉

(※2) けうしんへつたうこのつるきをえてこ

れは源しちうたいのつるきなりけう

しんかもつへきにあらすとてこんけん

にまいらせけりさてためよし一くにも

ちたりけるつるきをうしなふてかたて

のなきやうにおほえければはりま

のくによりかちをめしのほせしゝの

子をほんにしてすこしもたかへすつく

らるさいしやうのつるきなりければよろ

こひ玉ふ事かきりなしめぬきから

すをつくれはこからすとそ名つけたる

ためよしはしゝのここにからすとて一くし

てひさうしけるかいまのこからす二分は

かりなかりけりあるとき二のつるき

権現の御前に供へて籠り

たる山伏を別当になすべき

由、鈴木計らひ申ければ、「我が身

その器量不足」とて、教真別当のはじめなり。

(※2) 教真別当この剣を得て、「こ

れは源氏重代の剣なり。教

真が持つべきにあらず」とて、権現

に参らせけり。さて、為義一具に持

ちたりける剣を失ふて、片手

のなきやうに覚えければ、播磨

国より鍛冶を召し上せ、獅子の

子を本にして、少しも違へず作

らる。最上の剣なりければ、喜

び玉ふ事限りなし。目貫に烏

を作れば、小烏とぞ名つけたる。

為義は獅子の子、小烏とて一具し

て秘蔵しけるが、今の小烏二分は

かり長かりけり。ある時二の剣

をぬひてしやうしによせかけてをかれ  
たりけるか人もさはらぬにからく／＼とた  
をる、をときこえければいかにつるき  
こそころひぬれそんしやしつらんとて  
とりよせて見玉へは日ころは二分ばかり  
なかしとおもひつるこからすかし、のことお  
なしやうにそなりにけるふしきかな  
さるへきやうやあるきれたるかをれた  
るかとしてさきをみれともきれともおれ  
もせざりけりあやしんでつかをみる  
にめぬきおれてなかりけりぬひてこ  
れをみればつかの中二分ばかりあた  
らしくきれてめぬきをつきぬひて  
さかりたりと見えたり一ちやうし、のこ  
かきりたるよと心えてし、のこをかい  
みやうしてともきりと名つけたりその  
のち我としたけよはひおとろへたり  
いまはつるきもちでもなにかせんと  
てかのともきりこからす二つのつるき  
をちやくししもつけのかみよしともそ  
ゆつられけるか、りしほどにほうけん  
のかせんいてきたりよしともかたいりへ

(第1紙)

めされためよしはゐんの御所へめされ  
子とも六人あひくしてゐんの御しよへ  
そまいりけるほうけんのとし七月十一日

を抜ひて障子に寄せかけて置かれ  
たりけるが、人も触らぬにからく／＼と倒  
る、音聞こえければ、「いかに剣  
こそ転びぬれ。損じやしつらん」とて、  
取り寄せて見玉へば、日頃は二分ばかり  
長しと思ひつる小鳥が、獅子の子と同  
じやうにぞなりにける。「不思議かな。  
さるべきやうやある。切れたるか折れた  
るか」とて、先を見れども切れも折れ  
もせざりけり。怪しんで柄を見る  
に、目貫折れてなかりけり。抜ひてこ  
れを見れば、柄の中二分ばかり新  
しく切れて、目貫を突き抜ひて  
下がりと見えたり。一定、獅子の子  
が切りたるよと心得て、獅子の子を改  
名して友切と名づけたり。【F】その  
後、「我年長け、齡衰へたり。  
今は剣持ちても何かせん」と  
て、かの友切、小鳥、二つの剣  
を嫡子下野守義朝にぞ  
譲られける。か、りしほどに保元  
の合戦出で来たり。義朝が内裏へ

召され、為義は院の御所へ召され、  
子ども六人相具して院の御所へ  
ぞ参りける。保元の年七月十一日

とらのこくにいくさはしまりてたつ  
 ときにはいくさはて、けりた、三時  
 にいくさやふれてしんぬんまけたまふ  
 そのときためよしは天たいさんにはせ  
 のほりしゆつけしきほうはうとそ名  
 つけにける子なればよも見はなたしと  
 てよしともかもとへくたりけりけれ共  
 てうてきなればかなはずやかてよしとも  
 うけ給はりてきりにしこそむさんなれ  
 よしともほうけんのけんしやうにはさ  
 まのかみになりにけりしやてい六  
 人めしいたされ五人はきられぬため  
 とも一人はおちたりけるかほとをへて  
 きうしう田のねといふところよりめしい  
 たされていつのくにへなかされけりつ  
 めにはこれもきられにけりことも四人  
 もきられぬよしとも計のこりたりけれ  
 とも平治元年にあくうゑもんのかみ  
 のふよりにかたらはれてむほんをおこ  
 し子ともおほくもちたりしかとも三男  
 うひやうゑのすけよりともとて十三に  
 なりけるをまつたいの大しやうとや  
 見給ひけるかす、しといふよろひを  
 きせともきりといふつるきはかせさき  
 にうつたてけりされともてうてきな  
 れはにやいくさにうちまけてよしとも  
 はみやこをおちてにしあふみひらといふ

寅の刻に軍はしまりて、辰の  
 時には軍果て、けり。たゞ三時  
 に軍破れて新院負け給ふ。  
 その時為義は天台山に馳せ  
 上り出家し、義法房とぞ名  
 づけにける。子なればよも見放たじと  
 て、義朝がもとへ下りたりけれ共、  
 朝敵なれば叶はず。やがて義朝  
 うけ給はりて切りにしこそ無惨なれ。  
 義朝、保元の勳賞には左  
 馬頭なりにけり。舍弟六  
 人召し出され、五人は切られぬ。為  
 朝一人は落ちたりけるが、ほどを経て  
 九州田根といふところより召し出  
 されて、伊豆国へ流されけり。つ  
 めにはこれも切られにけり。子ども四人  
 も切られぬ。義朝計残りたりけれ  
 ども、平治元年に悪右衛門督  
 信頼に語らはれて謀反を起こ  
 し、子ども多く持ちたりしかども、三男  
 右兵衛佐頼朝とて十三に  
 なりけるを末代の大将とや  
 見給ひけるが、生絹といふ鎧を  
 着せ、友切といふ剣を佩かせ、先  
 に打つたてけり。されども朝敵な  
 ればにや、軍にうち負けて、義朝  
 は都を落ちて、西近江比良といふ

ところにと、まりてよもすから八まん大  
ほさつをそうらみたてまつりけるむかしは  
このつるきをもつてかたきをせめしに  
なひかぬ草木もなかりしに世のすゑに  
なりてつるきのせいもうせぬるにや大  
ほさつもすてさせ給たるか是ほとにい  
くさにさうなくまくへきにあらねとも

(第2紙)

よしともかおほちよしいゑは八まん大ほ  
さつの御子として八まん大郎と名をつ  
き七代まではいかてかすて給ふへきよ  
しともまては三代なりとてまどろみ  
たる御しけんにはくわれなんちをすつる  
にあらずもつところのともきりまると  
いふつるきはまん中かときにはかに  
あたへしつるきなりひけきりひさ丸  
とてはしめのまゝにてあらはつるきの  
みせいあるへきにしたいに名をつけ  
かゆるによつてつるきのせいもよはき  
なりことさらともきりといふ名をつ  
けられてかたきをはしたかへしとてとも  
きりとなりたるなりほうけんのため  
よしかきられ子とも、みなほろひし  
もともきりといふなのあるゆへなり  
このたひいくさにきりまけしもとも  
ともきりといふつるきのなのとかな

ところに留まりて、夜もすがら八幡大  
菩薩をぞ恨み奉りける。「昔は  
この剣をもつて敵を攻めしに  
靡かぬ草木もなかりしに、世の末に  
なりて剣の精も失せぬるにや。大  
菩薩も捨てさせ給たるか。是ほどに軍  
に左右なく負くべきにあらねども、

義朝が祖父義家は八幡大菩  
薩の御子として八幡大郎と名をつ  
き、七代まではいかてか捨て給ふべき。  
朝までは三代なり」とて、まどろみ  
たる。御示現にはく、「我汝を捨つる  
にあらず。持つところの友切丸と  
いふ剣は、満中が時、俄に  
与へし剣なり。鬚切、膝丸  
とてはじめのまゝにてあらば、剣の  
威勢あるべきに、次第に名をつけ  
替ゆるによつて、剣の精も弱き  
なり。ことさら友切といふ名をつ  
けられて、敵をばしたがへじとて友  
切となりたるなり。保元に為  
義が切られ、子ども、みな滅びし  
も、友切といふ名のあるゆへなり。  
この度軍に切り負けしも友  
切といふ剣の名の咎な

れはまつたく

われをうらむへからす

むかしのなに

かへしたらは

すゑはんしやう

すへき

なりと

あらたに

御し

けん

あり

けれ

は

(第3紙)

よしともゆめ覚てまことにあさましくぞおほえけるこの事をうけ給はるにあしくつけられたりけるものかなさてはむかしにかへすへしとてひけきりとそよはれけりさてひらをいて、たかしまをとをりけるによりとも馬上にてすこしまとろみてち、きやうたいにもをくれたりそのへんのものとも七八十人はせあはせていけとらんとしたりけるによりともおとろひてひけきをぬひてうちほらひければきすをかうむるものおほく又しするものもその

れば、全く我を恨むべからず。昔の名に返したらば、末は繁盛すべきなり」と、あらたに御示現ありければ、

義朝、夢覚てまことにあさましくぞ思えける。この事をうけ給はるに、「悪しくつけられたりけるものかな。さては昔に返すべし」とて、鬚切とぞ呼ばれけり。さて、比良を出で、高島を通りけるに、頼朝馬上にて少しまどろみて、父、兄弟にも遅れたり。その辺の者ども七、八十人馳せ合はせて生け捕らんとしたりけるに、頼朝驚ひて鬚切を抜ひてうち払ひければ、傷を被る者多く、又死する者もその

かすしらすそおほかりけりひけきりに  
かいみやうしけるしとそきこえける

平義士書之平雅通トモ云

(第4紙)

【第7図】

(第5紙)

そのよはしほつのしやうしかもとにしゆく  
してやはんばかりにみちしるへをえて  
ひかしえしうへうつりにけりふちかはふは  
のせきもふさかりて京よりうちてのく  
たるときこえければよしともはゆきの  
山にわけ入にけりよりともはおさな  
きみなれは大ゆきをわけかたくて山  
くちにと、まりにけりあくけん太はひと  
りはなれてひたのくにへおちぬよし  
ともはともなかはかりをあひくしてみ  
の、くにあふはかのちやうかもとにと、  
まりてうらつたひしておはりのくにうつ  
みのちう人おさたのしやうし思むね  
かしゆくにして平治二年正月一日の  
さうてうにしうく二人うたれにけり  
た、むねはよしともものらうしうまさき  
よかしうとなりさうてんのしうとむこ  
をうつて世にあらんとおもふこそうたてけ  
れた、むねはしうく二人のくひとこ

数知らずぞ多かりけり。鬚切に  
改名しける験とぞ聞こえける。

その夜は塩津庄司がもとに宿  
して、夜半ばかりに道しるべを得て、  
東江州へ移りにけり。藤川、不破  
関も塞がりて、京より討手の下  
ると聞こえければ、義朝は雪の  
山に分け入にけり。頼朝は幼  
き身なれば、大雪を分けがたくて山  
口に留まりにけり。悪源太は一人  
離れて飛驒国へ落ちぬ。義  
朝は友長ばかりを相具して、美濃  
国青墓の長がもとに留  
まりて、浦伝ひして尾張国内  
海の住人長田庄司忠致  
が宿にして、平治二年正月一日の  
早朝に主従二人討たれにけり。  
忠致は義朝の郎従正清  
が舅なり。相伝の主と掣  
を討つて世にあらんと思ふこそうたてけ  
れ。忠致は主従二人の首と小

からすといふたちとをはみやこにのほせ  
 へいけのけんさんに入てけりひやう  
 ゑのすけよりともは山くちにすてら  
 れたりしかひかしあふみくさの、しやうし  
 といふものにたすけられおはしまし  
 天しやうにかくれるたりしほとにより  
 ともおさなけれともかしこき人なりけ  
 れはつらくあんしけるはわれかくれるて  
 ありともしうにあらはれなん身こそ  
 はさてはつともけんしちうたいのつる  
 きをへいけにとられん事こそ、ろ  
 うけれいかにしてかかくすへきと思ひ  
 つ、しやうしにかたりていはくこの日こ  
 ろやしなはれたてまつるもせんせのこと  
 にこそ侍らめいまは一かうおやかたとた  
 のむなりおはりのあつたの大宮司  
 はよりともかためにはは、かたのおち

## (第6紙)

なりそれまでこのたちをもちてくだり  
 申さるへきやうはよりともはしかくの  
 ところにあらすたのひてさふらへともつるに  
 はのかるへきにあらすとひよりともこ  
 そころさるゝともこの太刀うしなはしと  
 そんし候しかるへくはあつたのやしるに  
 こめをひてたひ給へとの玉へはしやう  
 しおはりにくだり大宮しにこのよしを

鳥といふ太刀とをば都に上せ、  
 平家の見参に入てけり。兵衛  
 佐頼朝は山口に捨てら  
 れたりしが、東近江草野庄司  
 という者に助けられおはしまし、  
 天井に隠れるたりしほどに、頼  
 朝幼けれども賢き人なりけ  
 れば、つらく案じけるは、「我隠れるて  
 ありとも、始終にあらはれなん身こそ  
 はさて果つとも、源氏重代の剣  
 を平家に取られん事こそ心  
 憂けれ。いかにしてか隠すべき」と思ひ  
 つ、庄司に語りていはく、「この日頃  
 養はれ奉るも前世のこと  
 にこそ侍らめ。今は一行親方と頼  
 むなり。尾張の熱田の大宮司  
 は頼朝がためには母方の伯父

なり。それまでこの太刀を持ちて下り、  
 申さるべきやうは、頼朝はしかくの  
 ところに深く忍びて候へども、つるに  
 は逃るべきにあらず。たとひ頼朝こ  
 そ殺さるゝとも、この太刀失はじと  
 存じ候。しかるべくは熱田の社に  
 込め置ひてたひ給へ」との玉へば、庄  
 司尾張国に下り、大宮司にこの由を

申ければすなはちほうてんにおさめて  
けりさるほどにきよりのしやていみ  
かはの守よりもりは平治のかせんのか  
しやうにおはりのかみになりしかるに  
さふらひの中に弥平兵衛むねきよは  
もくたいにてくたりけるか上らくの時  
ひやうゑのすけかくれておはしましける  
を聞つけてさかしとりてのほりにけり  
やかてむねきよあつかりにけりしさいに  
をこなはるへかりしをいけのあまこせん  
のしきりに申うけていつのほうてう  
ひるかこしまへそなかされける二十一年  
のせいさうをへて卅四と申けるちせ  
う四年のなつのころたかくらのれう  
しならひに一ゐんのせんしを給つて  
むほんをおこされしときあつたのやし  
ろにこめられし

ひけきを

申いたして

たいし

けり

(第7紙)

【第8図】

(第8紙)

さてこそ日本五き七たうをはうち

申ければ、すなわち宝殿に納めて  
けり。さるほどに清盛の舎弟三  
河守頼盛は、平治の合戦の勸  
賞に尾張守になり、しかるに、  
侍の中に弥平兵衛宗清は  
目代にて下りけるが、上洛の時、  
兵衛佐隠れておはしましける  
を聞つけて、探し取りて上りにけり。  
やがて宗清預かりにけり。子細に  
行はるべかりしを、池尼御前  
のしきりに申請けて、伊豆の北条  
蛭が小島へぞ流されける。㊦二十一年  
の星霜を経て、卅四と申ける治承  
四年の夏の頃、高倉の令  
旨ならびに一院の宣旨を給つて、  
謀反を起こされし時、熱田の社  
に籠められし鬚切を申出して帶しけり。

さてこそ日本五畿七道をばうち

したかへ給ひけれ平治のかせんるとき  
 ときは(は)らの子にうしわかとてその、ち  
 九つのとしくらまでらの一のあしや  
 りとうくはうはうしんえん<sup>に</sup>のてしかく  
 ゑんはうあしやりしんせう<sup>に</sup>にしたかひ  
 てかくもんしのちにはしやなわうとぞ申  
 ける十六と申けるせう安四年の春の  
 ころ五てうのきちしすゑはるといふ  
 こかねあきんとにあひともしてとうこ  
 にくたりけるみちにてみつからおとこに  
 なりて九郎みなものよしつねと名  
 のりあふしうのこん大郎ひてひらに  
 たいめんすかくてしはらくはいくわいせし  
 ほとにひやうゑのすけのむほんのくはた  
 てと聞えければよしつねよろこひはせ  
 のほるかねさはいふところにてあに、けん  
 さんすむかし今の物かたりしたかひによ  
 ろこひ玉ふ事なめならすしなの、くに  
 のちう人きそのくわんしやよしなか是  
 もたかくらの宮のれうしを給ひてむ  
 ほんをおこするあひたしなのかうつけ  
 をはしめとしてほくろくたう七かこ  
 くうちなひかしみやこにのほり平け  
 をせめおとして天下をわかま、に  
 するあひた今は院の御所ほうちうし  
 とののをしよせてけつつけいんかくに  
 ところもをかすかつせんしてはうくわし

したがへ給ひけれ。平治の合戦の時、  
 常磐腹の子に牛若とて、その後  
 九つの年、鞍馬寺の一阿闍梨  
 東光坊円忍の弟子、覚  
 円坊阿闍梨円乘にしたがひ  
 て学問し、後には舍那王とぞ申  
 ける。十六と申ける承安四年の春の  
 頃、五条の橘次末春といふ  
 金商人に相供して、東国  
 に下りける道にて自ら男に  
 なりて、九郎源義経と名  
 乗り、奥州の権大郎秀衡に  
 対面す。かくてしばらく徘徊せし  
 ほどに、兵衛佐の謀反の企  
 てと聞えければ、義経喜び馳せ  
 上る。金沢といふところにて兄に見  
 参す。昔今の物語し、互いに喜  
 び玉ふ事なめならず。信濃国  
 の住人木曾冠者義仲、是  
 も高倉宮の令旨を給ひて謀  
 反を起こする間、信濃、上野  
 をはじめとして北陸道七か国  
 うち靡かし都に上り、平家  
 を攻め落として天下をわかま、に  
 する間、今は院の御所法住寺  
 殿に押し寄せて、月卿雲客に  
 ところもおかず合戦して放火し

やきはらふしかのみならずぬんをも五  
てうのたいりにをしこめまいらせくき  
やう殿上人をもくわんしよくをと、め  
ておひこめるこれによつてくけより  
くわんとうに御つかひありてことのし  
さいをおほせらるゝあひた兵衛のすけ  
大きにおとろきしやていかはのくわん  
しやのりより九郎くはんしやよしつね

(第9紙)

を大しやうとして六万よきをさし  
のほすけんりやくくはん年四月廿  
日みやこに入木そさまのかみをせめ  
おとして大津のあはつにて

くひをとる

(第10紙)

その後平家ついたうのためにつつ  
つのかに一のたに、はつかうするところ  
ろにくま野のへつたうけうしんか  
子そく五人をはほんくうしん宮なち  
わ(かた)たのへ五かしよにわけてをくこの  
うちにいつれも長したらんものをへ  
つたうをつかすへしとゆいこんしたり  
けるかそのころわたのへのたんそう長  
したりければへつたうにてそ有ける  
たんそうへつたう申けるはけんしは我ら

焼き払ふ。しかのみならず、院をも五  
条の内裏に押し込め参らせ、公卿  
殿上人をも官職を留め  
て追ひ籠める。これによつて、公家より  
関東に御使ひありて、ことの子  
細を仰せらるゝ間、兵衛佐  
大きに驚き、舍弟蒲冠  
者範頼、九郎冠者義経

を大将として六万余騎を差し  
上す。元暦元年四月廿  
日、都に入、木曾左馬頭を攻め  
落として大津の粟津にて  
首を取る。

その後、平家追討のために、撰  
津国一ノ谷に発向するところ  
ろに、熊野別当教真が  
子息五人をば、本宮、新宮、那智  
若田、田辺、五箇所に分けて置く。「この  
うちに、いづれも長じたらん者を別  
当を継がすべし」と遺言したり  
けるが、その頃は田辺の湛増長  
じたりければ、別当にてぞ有ける。  
湛増別当申けるは、「源氏は我等

かは、かたなりけんしの代となさん事  
 こそよろこはしけれひやうゑのすけよ  
 りとももたんそうかためにしたしきそ  
 かしそのおと、のりよりよしつねすけ  
 との、たいくわんにて木そついたうし  
 平けせめにくだらる、よしそのきこえ  
 ありけんしちうたいのつるきもとは  
 ひさまるくもきりいまはほえまるとて  
 ためよしの手よりけうしんにて（権現に）まいらせ  
 たりしを申うけて源しにあたへへい  
 けをうたせんとてこんけん（権現に）に申給て  
 みやこ（権現に）のほり九郎よしつねに  
 わたしてけりよしつねことによるこひ  
 てうすみとりとかいみやうすそのゆへは  
 くま野より春のやまをわけて出たり  
 なつ山はみとりもふかく春はうすかるらん  
 されは春の山を出たればうすみとりと  
 なつたりこのつるきをえてより日  
 ころは平家にしたかひたるつるせんを  
 むせんやうのともからなんかいさいかいの  
 つはものけんしにつくこそふしきなれ  
 二月三日源しはみやこをいて、一の  
 たに、むかふくんひやうを二手にわけ  
 てのりよし大しやうくんにて五万よ  
 きせつつのくによりをしよすうしろ  
 つめの大しやうくんよしつねみくさ山

（第11紙）

が母方なり。源氏の代となさん事  
 こそ喜ばしけれ。兵衛佐頼  
 朝も湛増がために親しきぞ  
 かし。その弟範頼、義経、佐  
 殿の代官にて木曾追討し、  
 平家攻めに下らる、由、その聞こえ  
 あり。源氏重代の剣、もとは  
 膝丸、蜘蛛切、今は吠丸とて  
 為義の手より教真得て権現に進らせ  
 たりしを申受けて、源氏に与へ平  
 家を討たせん」とて、権現に申給て  
 都に上り、九郎義経に  
 渡してけり。義経ことに喜び  
 て薄緑と改名す。そのゆへは  
 熊野より春の山を分けて出たり。  
 夏山は緑も深く、春は薄かるらん。  
 されば春の山を出たれば薄緑と  
 名づけたり。この剣を得てより、日  
 頃は平家にしたがひたりつる山陰  
 山陽の輩、南海西海の  
 兵、源氏につくこそ不思議なれ。  
 二月三日、源氏は都を出で、一ノ  
 谷に向かふ軍兵を二手に分け  
 て、範頼大將軍にて五万余  
 騎、摂津国より押し寄す。後  
 詰の大將軍義経、三草山

よりはつかうす大手からめて同心に七日のうのときよりみのときにいたるまでさんくゝにたゝかふ源しくさにくちかつてへいけはかけまけおもひくゝにおちにけり平家の大将軍ちせむの三位みちもり以下八人までうたれにけり

(第12紙)

【第9図】

(第13紙)

同十三日一もんのくひそのほかのくひとも大ちをわたしてこくもんの木にかくそのおんしやうには八月六日に九郎御さうし左衛門のせうになりやかてつかひのせんしをかうふりて五位のせうにとゝまる大夫判官とぞ申けるかはの御さうしのりよりはみかはのかみになされけりおなしき二年二月十一日に又平家せめにわたらんとてわたなへかんさきにてふなそろへをしけるとき九郎判官とかちはら平三かけときとさかろをたてうたてしのこうろんして中ふわになりにけりされともよしつねは大風にもおそれずしてわづかに舟五十そうはかりをしいたしたゝ五十きはかり

より発向す。大手、搦手同心に、七日の卯の時より巳の時にいたるまでさんくゝに戦ふ。源氏軍にうち勝つて、平家はかけ負け思ひくゝに落ちにけり。平家の大将軍越前三位通盛以下八人まで討たれにけり。

同十三日、一門の首、そのほかの首ども大路を渡して獄門の木に懸く。その恩賞には、八月六日に九郎御曹司左衛門尉になり、やがて使ひの宣旨を蒙りて、五位尉に留まる。大夫判官とぞ申ける。蒲御曹司範頼は三河守になされけり。同じき二年二月十一日に又平家攻めに渡らんとて、渡部、神崎にて船揃へをしける時、九郎判官と梶原平三景時、逆櫓を立てう立てじの口論して中不和になりにけり。されども義経は大風にも恐れずして、わづかに舟五十艘ばかり押し出し、たゞ五十騎ばかり

にてはせわたるかちはらははこのいしゆ  
 にや有けん大かせにやおそれけん  
 あくる日にそわたしけるよしつねは  
 あんないしやをしるへにてやしまの  
 たちをやきはらひ三月廿二日にはなか  
 とのくにあかまのせきにはせむかふ  
 のりよりは九こくのくんひやうをあひ  
 くしてふせんのかにもんしのせきに  
 むかひ平家の中にとりこめてたかひ  
 にかきりとそたゝかひけるつゐに平  
 家せめおとされてせんでいをは二位  
 とのおひまいらせてうみにいらせ給ひ  
 けりさきのおほいと以下の三十八人  
 いけとられけりはうくわんとのさいく  
 しよくにておほくのたゝかひしけれとも  
 一しよもきすをかふむらすまいとのいく  
 さにうちかつて日ほんこくに名をあけ  
 しこともたゝこのつるきのちからなりよ  
 しつねなんかいさいかいをうちしたかへ  
 平家のいけとりともあひくして三しゆ  
 のしんきもろともにみやこへかへし入

(第14紙)

たてまつりけりたゝし三しゆのしん  
 きのうちほうけんはうせにけりないし  
 ところとしんしはかり

みやこに

にて馳せ渡る。梶原はこの意趣  
 にや有けん、大風にや恐れけん、  
 明くる日にぞ渡しける。義経は  
 案内者をしるべにて、屋島の  
 館を焼き払ひ、三月廿二日には長  
 門国赤間関に馳せ向かふ。  
 範頼は九国の軍兵を相  
 具して、豊前国門司関に  
 向かひ、平家の中に取り込めて、互ひ  
 に限りとぞ戦ひける。つゐに平  
 家攻め落とされて、先帝をば二位  
 殿負ひ参らせて海に入らせ給ひ  
 けり。先の大い殿以下三十八人  
 生け捕られけり。判官殿、在々  
 所々にて多くの戦ひしけれども、  
 一所も傷を被らず、毎度の軍  
 にうち勝つて日本国に名をあけ  
 しことも、たゝこの剣の力なり。義  
 経、南海西海をうちしたがへ、  
 平家の生け捕りども相具して、三種  
 の神器もろともに都へ返し入

奉りけり。たゝし三種の神  
 器のうち、宝剣は失せにけり。内侍  
 所と神璽ばかり都に上らせ玉ふ。

のほらせ

玉ふ

(第15紙)

【第10図】

(第16・17紙)

そもく〜ていわうの御たからにしんしほ  
うけんないしところとて三つありをよそ  
しんしと申は神代よりつたはりて代々  
のみかとの御まほりにてしるしのはこ  
におさめけりこのはこひらく事なし  
見る人もなしこれによつて後冷泉  
院の御時いか、おほしけるこのはこを  
ひらかんとてふたをとり給ひしにたち  
まちにはこよりはくうん立のほり玉ひ  
けりや、ありてくもはもとのことくかへり  
いらせ玉ひぬきいのないしふたをして  
からけおさめたてまつる日本はせうこ  
くなりといへとも大こくにまさる事  
はこれなりとぞ申ける一天のきみ  
はんせうのあるしたにも御心にまかせ  
すして御らんせられぬものなれば  
ましてほん人いふへきにあらすいはん  
やほんけにおゐてをやしんしとは  
かみのをしてといふ文字なりかみの  
をしてといふはいかなるしさいにてて

【田】そもく〜帝王の御宝に、神璽、宝  
劍、内待所とて三つあり。凡そ  
神璽と申は、神代より伝はりて、代々  
の帝の御守りにて、駿の箱  
に納めけり。この箱開く事なし。  
見る人もなし。これによつて後冷泉  
院の御時、いかゞ思しける、この箱を  
開かんとて蓋を取り給ひしに、たち  
まちに箱より白雲立ち登り玉ひ  
けり。や、ありて雲はもとのごとく返り  
いらせ玉ひぬ。紀伊内侍、蓋をして  
緘げ納め奉る。日本は小国  
なりといへども、大国にまさる事  
はこれなりとぞ申ける。一天の君、  
万乗の主だにも御心にまかせ  
ずして御覽せられぬものなれば、  
まして凡人いふべきにあらず。いはん  
や凡家におゐてをや。神璽とは  
神のをしてといふ文字なり。神の  
をしてといふはいかなる子細にて帝

いわうの御たからとはなるやらんおほ  
つかなしくわしくこれをたつぬれば  
わかつてうのおこりより出たり天神七代  
のはしめくにとこたちのみこと此下  
にくになからんやとてあまのさかほこ  
をおろして大かいのそこをさくり給ふ  
にくになければほこを引あげ給ひ  
けるにほこのしたゝりおちと、まりこ  
りかたまりしまとなりけるわかつて  
うの出きたるへきせんへうにて大かい  
のなみのうへに大日といふもんしうかへり  
もしのうへにほこのしたゝりと、まり  
てしまとなるかゆへに大日本国と  
なつてたりあはちのくにはこれ日ほん  
のはしめなりくにとこたちのみこと  
より三代はおとこのすかたのみあらはれ

## (第18紙)

て女のすかたはなし第四代のうゑち  
のみことより第六代おもたるのみこと  
まで三代は男女のすかたこれありと  
いへともふうふこんかうのきはなかりけり  
第七いさなきいさなみのみことあはち  
のくに、くたりてなん女こんかうあら  
はれたり山石草木をうへ給へりおほし  
まのくにをつ(く)りつきにくにかすをつ  
くり又世のぬしなからんやとて一女三

王の御宝とはなるやらん。おほ  
つかなし。委しくこれを尋ぬれば、  
我が朝の起こりより出たり。天神七代  
のはじめ、国常立尊、「此下  
に国なからんや」とて、天逆鉾  
を下ろして大海の底を探り給ふ  
に、国なければ鉾を引上げ給ひ  
けるに、鉾の滴り落ち留り、凝  
り固まり、島となりける。我が朝  
の出きたるべき前表にて、大海  
の波の上に大日といふ文字浮かべり。  
文字の上に鉾の滴り留り  
て島となるがゆへに、大日本国と  
名づけたり。淡路国はこれ日本  
のはじめなり。国常立尊  
より三代は、男の姿のみ顕れ

て女の姿はなし。第四代の涅槃  
尊より第六代面垂尊  
まで三代は、男女の姿これ有り  
といへども、夫婦婚合の義はなかりけり。  
第七伊弉諾、伊弉册尊、淡路  
国に下りて男女婚合顕  
れたり。山石草木を植へ給へり。大島  
国を作り、次に国の数を作  
り、又世の主なからんやとて、一女三

なんをうみ給へりいはゆる日の神月  
のかみひるこそさのおのみことなり  
日の神と申は伊勢太神宮あまてる  
おほんかみこれなり月神と申は月よ  
みのみこと高野丹生の大明神と  
かうすひるこは三年まであしたゝぬ  
みことゝておはしければあまのいはくす  
ふねにのせたてまつり大かいかはらに  
をし出してなかされたまひしかせつ

(第19紙)

つのくになかれよりてうみをり  
やうする

神となつて

えひす三郎

とのと

あらはれ

給ひて

にしの宮

に

おはし

ます

(第20紙)

【第11図】

(第21紙)

男を生給へり。所謂、日神、月  
神、蛭子、素盞烏尊なり。

日神と申は伊勢太神宮天照  
御神これなり。月神と申は月読  
尊、高野丹生の大明神と  
号す。蛭子は三年まで足立たぬ  
尊とておはしければ、天磐樟  
船に乗せ奉り大海原に  
押し出して流され給ひしが、撰

津国に流れ寄りて海を領  
ずる神となつて、夷三郎殿と顕れ給ひて、西  
の宮におはします。

## 〈第三軸〉

そさのおのみことは御心あらしと  
 ていつものくに、なかされのちに  
 は大やしろと成給へり扱いさなき  
 いさなみのみことはくにをはあまてる  
 おほん神にゆつり山をは月よみの  
 みことにたてまつりうみをはひるこの  
 りやうし給へりそさのおのみことはふん  
 りやうなしとて御あにたちとたひく  
 かつせんにをよふこれによつてふけ  
 うせられて雲しうへそなかされける  
 扱あまてるおほん神は日本をゆつり  
 えたまひなから心のま、にもしんたい  
 せず第六天のまわうと申はたけし  
 さいてんにちうしてよくかいの六天  
 の六天（六天）をわかま、にりやうせりし  
 かも今の日本こくは六天の下なり  
 わかりやうないなれはわれこそしんた  
 いすへき所にこのくには大日といふ  
 もしのうへにいてきたるしまなれは  
 ふつほうはんしやうのちなるへし是  
 よりして人みなしやうしをはなるへし  
 と見えたりされはこ、には人をもすま  
 せず仏ほうをもひろめすしてひとへ  
 にわかしりやうとせんとてめんせず  
 ありければあまてるおほんかみちから  
 をよはせ給はて三十一万五千さいを

素戔鳴尊は御心荒しと  
 て、出雲国に流され、後に  
 は大社となり給へり。扱、伊弉諾、  
 伊弉冊尊は、国をば天照  
 大神に譲り、山をば月読  
 尊に奉り、海をば蛭子の  
 領じ給へり。素戔鳴尊は分  
 領なしとて御兄達と度々  
 合戦に及ぶ。これによつて不孝  
 せられて雲州へぞ流されける。  
 扱、天照大神は日本を譲り  
 得給ひながら心のま、にも進退  
 せず。第六天魔王と申は他化自  
 在天に住して欲界の六天  
 を我がま、に領ぜり。し  
 かも今の日本国は六天の下なり。  
 「我が領内なれば我こそ進退  
 すべき所に、この国は大日といふ  
 文字の上に出來たる島なれば、  
 仏法繁昌の地なるべし。是  
 よりして人みな生死を離るべし  
 と見えたり。さればこ、には人をも住ま  
 せず、仏法をも弘めずして、偏  
 に我が私領とせん」とて免せず  
 ありければ、天照大神力  
 及ばせ給はて、三十一万五千歳を

そへたまひけるゆつりをはうけながら  
(星) 霜つもりければ太神まわうにあひ  
給ひていはくしかるへくは日本こく  
をゆつりのまゝにゆるし給はふつほう  
をもひろめすそうはうをもちかけす

(第1紙)

とありければまわうこゝろとけてさやう  
にふつほうそうをちかけしとおほせら  
るとくくたてまつるとて日本をはし  
めてゆるしあたへしとき手しるしに  
とてをしてをたてまつり玉ふいまの  
し(ん)しとはこれなり

(第2紙)

【第12図】

(第3紙)

つきにほうけんと申は神代よりつた  
はれるれいけん二つありと見えたりあ  
まのむら雲のけんあまのは、きりの  
けんなりあまの村雲のけんは代々  
みかとの(※3)天武天わうの御宇しゆてう元  
年六月におはりのくにあつたのやし  
ろにこめられたり又あまのは、きりのつる  
きはもととはつかのけんと申せしかお  
ろちをきつてのちはあまのは、きり

ぞ経給ひける。譲りをば受けながら  
星霜積もりければ、太神魔王にあひ  
給ひていはく、「しかるべくは日本国  
を譲りのまゝに免じ給はば、仏法  
をも弘めず僧法をも近づけず」

とありければ、魔王心解けて、「さやう  
に仏法僧を近づけじと仰せら  
る。疾くく奉る」とて日本をはじ  
めて赦し与へし時、「手験に」  
とてをしてを奉り玉ふ。今の  
神璽とはこれなり。

□次に宝剣と申は、神代より伝

はれる霊剣二つありと見えたり。天  
村雲剣、天のは、きりの  
剣なり。天村雲剣は代々  
帝の(※3)天武天皇朱鳥元  
年六月に尾張国熱田の社  
に籠められたり。又天のは、きりの剣  
はもととは十柄剣と申せしが、大  
蛇を切つて後は天のは、きり

のけんとかうすおろち（の）をのなをは、  
 といふゆへなりをろちをのけんとも  
 名つくかのつるきのちにはやまとの  
 くにいそのかみふるのやしろにおさま  
 れりむかしそさのおのみことはいつも  
 のくに、おはしけるとさかのくにのひ  
 のかはかみの山におろちすみけりお  
 かしらとも八つあり八のお八のた  
 に、はいくわいすまなこは日月のごとし  
 せなかにはこけむしてもろくの木  
 草おひたりとしく人をのむおやを  
 とられて子はかなしみ子をとられて  
 はおやかなしむ村南村北にくくする  
 こゑたえす国中の人たねみなとりう  
 しなはれていまは山神のふうふて  
 なつちあしなつちはかりのこれり一人  
 のむすめあり

いなたひめと

名つけて

しやうねん

八さいなり

これを

なかに

をき

つゝ

なきかな

しむ

の剣と号す。大蛇の尾の名をは、  
 といふゆへなり。大蛇の剣とも  
 名づく。かの剣、後には大和  
 国磯上布留の社に納ま  
 れり。〔J〕晋、素戔嗚尊は出雲  
 国におはしける時、かの国の簸  
 の川上の山に大蛇住みけり。尾  
 頭ともに八つあり。八の尾八の谷  
 に徘徊す。まなこは日月のごとし。  
 背中には苔生して諸々の木  
 草生ひたり。年々人を呑む。親を  
 取られて子は悲しみ、子を取られて  
 親悲しむ。村南村北に哭する  
 声絶えず。国中の人種みな取り失  
 はれて、今は山神の夫婦手  
 なづち足なづちばかり残れり。一人  
 の娘あり。稲田姫と名づけて生年八歳なり。  
 これを中に置きつゝ、泣き悲しむ事限りなし。

事

かきりな

し

(第4紙)

【第13図】

(第5紙)

みことあはれみ給ていかにととひ給ふ  
てなつちこたへていはくわれにさいあひ  
のむすめありいなた姫と申をこん  
ややまたのおろちのためにのまれん  
ことをかなしむなりと申ければみこと  
ふひんにおほしめしむすめをわれに  
えさせはおろちをうつてとらせんことは  
いかにとの玉へはてなつちあしなつち  
大きによるこふ色見えておろちをた  
にもうち給は、むすめをまいらせ申へし  
と申ければみことおろちをうち給へ  
きはかりことをそしたまひけるゆかをた  
かくかきいなた姫をうつくしきにしや  
うそくさせてかつらにゆつのつまくし  
をさしてたてられたり四方には火を  
たきまはして火よりほかにもたひ  
にさけを入れて八方にをくやはんにお  
よんてやまたのおろちきたりつゝ、い  
なたひめをのまんとするゆかのうへに

尊あはれみ給ひて、「いかに」と問ひ給ふ。  
手なづち答へていはく、「我に最愛  
の娘あり。稲田姫と申を、今  
夜八岐大蛇のために吞まれん  
ことを悲しむなり」と申ければ、尊  
不便に思しめし、「娘を我に  
得させば、大蛇を討つて取らせんことは  
いかに」との玉へば、手なづち足なづち  
大きに喜ぶ色見えて、「大蛇をだ  
にも討ち給は、娘を参らせ申べし」  
と申ければ、尊、大蛇を討ち給へ  
き謀をぞし給ひける。床を高  
く搔き、稲田姫を美しきに装  
束させて、鬘に湯津爪櫛  
を指して立てられたり。四方には火を  
たきまはして、火より外に甕  
に酒を入れて八方に置く。夜半に及  
んで八岐大蛇来たりつゝ、稲  
田姫を吞まんとする。床の上に

ありと見れども四方に火をたきま  
 はしたればよるへきやうなかりけりとき  
 うつるまでよくみれはいなたひめのかけ  
 もたひのさけにうつり見えたりけり  
 おろち是をよろこひ八のもたひに  
 八のかしらをうちひたしてあくまでさ  
 けをのみてけりあまりにのみえひて  
 せんこもしらすふしたりけるみことつる  
 きをぬきもつておろちをつたく  
 にきり給ふその八のおにいたつてつる  
 きのか、はるところありあやしんて是  
 を見たまへはつるきのやいはしろみ  
 たり尾をさきのけてこれを見るに  
 中に一のつるきありこれさいしやうの  
 つるきなりとてあまてるおほん神に奉る  
 あまの村雲のけんとなつく此けんお  
 ろちの尾に有りし時こくうんつねにお

## (第6紙)

ほふゆへにあまの村雲のけんと名づけた  
 り此おろちはおより風をいたしかうへよ  
 り雨をふらす風水りうわうの天くたり  
 ける也てなつちは姫のたすかりたる事  
 をよろこひみことをむこにとり奉る  
 とき丸さ三尺六寸のか、みをひきて  
 ものに奉るいなた姫みことに参しとき  
 かつらにさし、ゆつのつまくしをうしろさ

ありと見れども、四方に火をたきま  
 はしたれば、寄るべきやうなかりけり。時  
 移るまでよく見れば、稲田姫の影  
 甕の酒にうつり見えたりけり。  
 大蛇是を喜び、八の甕に  
 八の頭をうち浸して、飽くまで酒  
 を呑みてけり。あまりに呑み酔ひて、  
 前後も知らず臥したりける。尊、剣  
 を抜きもつて、大蛇をつたく  
 に斬り給ふ。その八の尾にいたつて剣  
 のか、はるところあり。怪しんて是  
 を見給へば、剣の刃白み  
 たり。尾の裂きのけてこれを見るに、  
 中に一の剣あり。「これ最上の  
 剣なり」とて天照大神に奉る。  
 天村雲剣と名づく。此剣大  
 蛇の尾に有りし時、黒雲常に覆

ふゆへに天村雲剣と名づけた  
 り。此大蛇は尾より風を出し、頭よ  
 り雨を降らす。風水龍王の天降り  
 ける也。手なづちは姫の助かりたる事  
 を喜び、尊を掣に取り奉る  
 時、丸さ三尺六寸の鏡を引出  
 物に奉る。稲田姫尊に参し時、  
 鬘に挿し、湯津爪櫛を後様

まになけてはしめてみことに参り給ふ

(第7紙)

【第14図】

(第8紙)

わかれのくしとは是なりみこといつも  
のくに、宮つくりしていなたひめを  
さいしつとしこんかうし給へりあにたち  
とふはの事あしくやおほしめされけん  
しやの尾より取いたしたるあまの村  
雲のけんならひに天のは、きりの劍  
てなつちかむこ引出もの、か、み以上三  
しゆをあまてるおほん神にたてまつり  
てふけうはゆるされ給へりかのむこ引  
出もの、か、みはいまのないしところ是也  
人わう第四代のみかといとく天わうの  
御とき天より三のか、みくたれりその  
うちひとつはむこ引出もの、か、みなり  
又二つのたからはあまてるおほん神の  
あまのいはとちこもらせ給し時  
わかかたちをいうつしと、めてしそんな  
か、みを見てはわれを見るかごとくに  
おもへとてうつし給へるか、みなりはしめ  
い給へるはちいさしとて又いなをし玉へり  
はしめの御か、みはきいのくにの日前  
のみやといは、れたりのちの御か、みは

に投げて、はじめて尊に参り給ふ。

別れの櫛とは是なり。尊、出雲  
国に宮作りして、稲田姫を  
妻室とし婚合し給へり。兄達  
と不和の事、悪しくや思し召されけん、  
蛇の尾より取り出したる天村  
雲劍、ならびに天のは、きりの劍、  
手なづちが髙引出物の鏡、以上三  
種を天照大神に奉り  
て不孝は赦され給へり。☐かの髙引  
出物の鏡は今の内侍所是也。  
人皇第四代の帝懿徳天皇の  
御時、天より三の鏡降れり。その  
うち一つは髙引出物の鏡なり。  
又二つの宝は天照大神の  
天岩戸に閉ち籠もらせ給し時、  
「我が形を鑄うつし留めて、子孫この  
鏡を見ては、我を見るがごとくに  
思へ」とてうつし給へる鏡なり。はじめ  
鑄給へるは小さしとて又鑄直し玉へり。  
はじめの御鏡は紀伊国の日前  
宮と祝はれたり。後の御鏡は

伊勢のくに二見のうらに一里はかり  
 のおきにはまそふておはしますか  
 しほのみつる時はいはのうへにあかりしほ  
 のひるときはさかりていはにそふてお  
 はしますうみのなきたるときは舟にて  
 をしわたりてせんたちありておかむなり  
 むこ引出ものゝかゝみはないしところなり  
 みかとの御まもりにて大内におはしま  
 すを第十代のみかとしゆしん天わう  
 の御とき同殿しかるへからすとて殿を  
 つくりかゝみをいてあたらしきを御ま  
 もりとしふるきをはあまてる大神にかへ  
 しまいらせ給けりいうつし玉ふ御かゝみもつ  
 くりかへられたるほうけんもれいけんはす  
 こしもおとり給はすしかるに十二代のみかと

(第9紙)

けいかう天わう四十年のなつとういお  
 ほく御まつりことそむきてくはんとうしつ  
 まらすみかとの第二のわうし日本武  
 のみこと御心もたけく御ちからもすく  
 れておはしければかのわうしをつかはし  
 てたいらけしにおなしきとしの冬  
 十月にみちにて、まづ太神宮に  
 まいり玉ふやうらひめのみことをして  
 天わうのいのちにしたかつてあつませ  
 めにおもむくよしを申されたりけれ

伊勢国二見の浦に一里ばかり  
 の沖に岩間添ふておはしますが、  
 潮の満つる時は岩の上に上がり、潮  
 の干る時は下がりて岩に添ふてお  
 はします。海のなきたるときは舟にて  
 押し渡りて先達ありて拝むなり。  
 聶引出物の鏡は内侍所なり。  
 帝の御守りにて大内におはしま  
 すを、第十代の帝崇神天皇  
 の御時、同殿しかるべからすとて、殿を  
 作り、鏡を鑄て、新しきを御守  
 りとし、古きをば天照大神に返  
 し参らせ給ひけり。鑄うつし玉ふ御鏡も、作  
 り替えられたる宝剣も、靈験は少  
 しも劣り給はず。ししかるに十二代の帝

景行天皇四十年の夏、東夷多  
 く御政を背て関東静  
 まらず。帝の第二の皇子日本武  
 尊、御心も武く御力もすぐ  
 れておはしければ、彼の皇子を遣はし  
 て平らげしに、同じき年の冬  
 十月に道に出で、まづ太神宮に  
 参り玉ふ。やうら姫の尊をして、  
 天皇の命にしたがつて東攻  
 めに趣く由を申されたりけれ

はしゆしん天わうのときかへしをかる  
るあまの村雲の剣をいたし給ふ  
やまとたけのみことこれをたいし  
てとうこくにくたり給ふにみちにふし  
きありいつものくに、てそさのおの  
みことにかいせられたりしやまたのお  
ろちあまくたりむたいにいのちを  
うしなはれつるきをうははれしいき  
とをりさんせすいまやまとたけの  
みことのたいしてとうこくにおもむ  
き給ふをせきと、めてうはひかへさん  
そのためにとくしやとなりてふは  
のせきの大ちをふしふさきたりみ  
こと事ともし給はすおとりこえてそ  
とをられける

(第10紙)

【第15図】

おはりのくに、くたりて松子のしま  
といふところに源大夫といふもの、家  
にとまり給へり大夫にむすめあり  
名をいはとひめといひけりみめかたち  
よかりければみことこれをめしてさい  
はひし玉ふ一夜のちきりふかうしてた  
かひに心ざしあざからすかくてもあら

(第11紙)

ば、崇神天皇の時返し置かる  
る天村雲剣を出し給ふ。  
日本武尊是を帶し  
て東国に下り給ふに、道に不思  
議あり。出雲国にて素戔鳴  
尊に害せられたりし八岐大  
蛇、天降り、無体に命を  
失はれ、剣を奪はれし憤  
り散せず、今日本武  
尊の帯して東国に赴  
き給ふをせき留めて奪ひ返さん  
そのために毒蛇となりて、不破  
関の大路を伏し塞ぎたり。尊、  
事ともし給はず、踊り越えてぞ  
通られける。

尾張国に下りて、松子の島  
といふところに源大夫といふ者の家  
に泊まり給へり。大夫に娘あり。  
名を岩戸姫といひけり。眉目貌  
よかりければ、尊これを召して幸  
し玉ふ。一夜の契り深うして互  
ひに心ざし浅からず。かくてもあら

まほしくおほしめしけれともゑひすを  
 せめにくたるものか女につきてと、まら  
 む事あしかりなんと思はれければかへらん  
 時又とたのんてやかてうち出でする  
 かのくにふしのすそのにいたるそのく  
 にのけうとこの野にしかおほく候  
 かりしてあそはせ給へと申ければみこ  
 とすなはちいて、あそひ玉ふにけう  
 とら野に火をつけてみことをやき  
 ころし奉らんとしける時はき給へるあ  
 まのむら雲のけんをぬいてくさをな  
 き給ふにかりくさに火つきておひや  
 かしかりけるにみことは火石水石をな  
 かけ給ひたりければすなはち石より  
 水いて、きえてけり又火石をなけ  
 かけ給ひければ石の中より火いて、  
 けうとおほくやけしにけりそれ  
 よりしてそその野をはやけそめ野  
 とこそ名つけけるむら雲のけんをは  
 くさなきのけんとそ申ける

(第12紙)

## 【第16図】

みことふりすて給ひしいはとひめの  
 事わすれかたくこゝろにかゝりければ

(第13紙)

まほしく思し召しけれども、夷を  
 攻めに下る者が女につきて留まら  
 む事悪しかりなんと思はれければ、帰らん  
 時又とたのんて、やがてうち出で駿  
 河国富士の裾野にいたる。その国  
 の凶徒、「この野に鹿多く候。  
 狩して遊ばせ給へ」と申ければ、尊  
 すなはち出でて遊び玉ふに、凶  
 徒等野に火をつけて尊を焼き  
 殺し奉らんとしける時、帯き給へる天  
 村雲剣を抜いて、草を薙  
 ぎ給ふに、荇草に火つきておひや  
 かしかりけるに、尊は火石水石を投  
 げかけ給ひたりければ、すなはち石より  
 水出で、消えてけり。又火石を投げ  
 かけ給ひければ、石の中より火出で、  
 凶徒多く焼け死にけり。それ  
 よりしてぞ、その野をば焼けそめ野  
 とこそ名つけける。村雲剣をば  
 草薙剣とぞ申ける。

尊振り捨て給ひし岩戸姫の  
 事忘れがたく心に懸りければ、

山かへり江かへりといふともこゝろさし  
のよしをかひめにしらせんとて火  
石水石の二のいしをするかのふし  
のすそ野よりおはりのまつこのし  
まへこそなけられけるかのところの紀  
大夫といふものゝつくれる田のきた  
の耳にくわせきはおちみなみの  
耳にすいせきかおつ二のいしとゝ  
まる夜紀大夫のつくりける田一夜か  
うちにもりとなりておほくの木お  
いしけりたり火石のおちたるきた  
のかたにはいかなるこゝろ水にもみつ  
いつる事なく水石のおちたるみなみ  
のかたにはなたるかんはつにもみつ  
たゆる事なしこれ火石水石のしるし  
なりみことはこれよりおくへいり給  
てくに／＼のけうとをたいらけ所／＼  
のあく神をしつめ同五十三年おは  
りへかへり又いはとひめにさいはひし  
給へりさてしもはつへき事ならねは  
みやこへのほり給けるにくさなき  
のけんをおもひたえせよとていはと  
ひめにわたし給ひしをわれ女の身な  
れはつるきもちてなにかせんとゝ  
もちてのほり給へと申されければ  
そんなるむねありとてくわのえたに  
かけてみことはのほり給ひにけり

山復り江復りといふとも志  
の由をかの姫に知らせんとて、火  
石水石の二の石を駿河の富士  
の裾野より尾張の松子の島  
へこそ投げられける。かのところの紀  
大夫といふ者の作れる田の北  
の耳に火石は落ち、南の  
耳に水石が落つ。二の石留  
まる夜、紀大夫の作りける田、一夜が  
うちに森となりて、多くの木生  
い繁りたり。火石の落ちたる北  
の方には、何たる洪水にも水  
出る事なく、水石の落ちたる南  
の方には、何なる旱魃にも水  
絶ゆる事なし。これ火石水石の験  
なり。尊はこれより奥へ入り給  
て、国々の凶徒を平らげ、所々  
の悪神を鎮め、同五十三年尾張  
へ帰り、又岩戸姫に幸し  
給へり。さてしもはつへき事ならねば、  
都へ上り給ひけるに、草薙  
劍をば「思ひ絶えせよ」とて、岩戸  
姫に渡し給ひしを、「我女の身な  
れば、劍持ちて何かせん。たゞ  
持ちて上り給へ」と申されければ、  
「存ずる旨あり」とて桑の枝に  
懸けて、尊は上り給ひにけり。

さるほとにやまたのおろちいふき大  
みやう神はみことにおとりこえられて  
えと、めぬことをほんいなく思ひてま  
へよりもなを大きにたかくあらはれ  
ておほちをふさき給へりみことはなを  
もこと、ともし給はすはしりこえてとを  
り給けるに

(第14紙)

## 【第17図】

(第15紙)

ひき給けるあしのさきおろちにちと  
さはりたりければそれよりやかてほとお  
り上て五たい身分しのひかたかうち  
ふしぬへくそおほせともこ、ろかうにおは  
しけるほとになやみながらあふみのくに  
までこえ給ふみちのほとりに水のなか  
れいて、す、しくせいけつなりければ  
端なるいしにこしをかけて水にあしを  
さしおろしてひやし給けるほとにたち  
ところのほとをりさめにけりそれより  
してこのみつをはさめか井とぞ名  
つけたるほとをりさめたれとも御なう  
おもかりければいけとりえひすをは太  
神宮にたてまつりたけひこをもつて  
このよしをそうし給ふみことはなをあ

さるほどに、八岐大蛇、伊吹大  
明神は尊に踊り越えられて、  
え留めぬことを本意なく思ひて、前  
よりもなを大きに高く頭れ  
て大路を塞ぎ給へり。尊はなを  
もことともし給はず、走り越えて通  
り給けるに、

引き給ける足の先、大蛇にちと  
触りたりければ、それよりやがてほとお  
り上て、五体身分忍びがたかう  
臥しぬべくぞ思せども、心剛におは  
しける程に、悩みながら近江国  
まで越え給ふ。道の辺りに水の流  
れ出で、涼しく清潔なりければ  
端なる石に腰をかけて、水に足を  
さし降して冷やし給ひけるほどに、たち  
どころにほとをり醒めにけり。それより  
してこの水をば醒井とぞ名  
づけたる。ほとをり醒めたれども御悩  
重かりければ、生け捕りの夷をば太  
神宮に奉り、武彦をもつて  
この由を奏し給ふ。尊はなを近

ふみのくに千のまつはらといふところ  
になやみふし給けるかまつこのしまに  
やとり給ひしいはとひめはみことのなこ  
りをおしみて有もあらぬ心ちして  
たつねのほり給ひけるかあふみのく  
に千のまつはらにおはしけりみことは  
なやみなから思ひ出されてこひしく  
おほしけるところにはとひめきたり  
たまひければあまりのよろこひしさに  
あはつまよとて大きによるこひ給けり  
それよりしてとうこくをはあつまとそ  
なつけたるかくて日かすを、くり給ふほ  
とにみことは御なふおもくならせ給て  
つゐにうせ給にけり白鳥となつてみな  
みをさしてとひ玉ふいはとひめはみことの  
わかれをかなしみてもたへこかれ給へ  
ともそのかひなきことなればなく／＼お  
はりのくにへかへり給ふけりみことにつ  
かへる人／＼わかれをかなしみたてまつり  
てあとめにつきてゆくほとにきいの  
くになくさのこほりにしはらくおちと、

(第16紙)

まりけるかこのところをあしくやおほし  
けんとうこくにとひかへりおはりの国  
まつこのしまにそとひゆきける白  
鳥にてとひ給ひし時はなかさ一丈

江国千の松原といふところに  
悩み臥し給ひけるが、松子の島に  
宿り給ひし岩戸姫は、尊の名残  
を惜しみて有もあらぬ心地して  
尋ね上り給ひけるが、近江国  
千の松原におはしけり。尊は  
悩みながら思ひ出されて、恋しく  
思しけるところに、岩戸姫来たり  
給ひければ、あまりの喜ばしさに  
「あは、妻よ」とて大きに喜び給ひけり。

それよりして東国をば吾妻とぞ  
名づけたる。かくて日数を送り給ふほど  
に、尊は御悩重くならせ給ひて  
つゐに失せ給にけり。白鳥となつて南  
を指して飛び給ふ。岩戸姫は尊の  
別れを悲しみて、悶え焦れ給へ  
ども、その甲斐なきことなれば泣く／＼尾  
張国へ帰り給ふけり。尊に仕  
へる人々、別れを悲しみ奉り  
て跡目につきて行く程に、紀伊  
国名草郡にしばらく落ち留

まりけるが、このところを悪しくや思し  
けん、東国に飛び返り尾張国  
松子の島にぞ飛び行きける。白  
鳥にて飛び給ひし時は、長さ一丈

のしらはた二なかれと見えしなりおはりのくに、とひおちぬそのところをば白鳥つかとなつてたりはたのおちたるところをははたやとていまにありひやうゑのすけよりもはまつたいのけんしの大しやうとなるへきゆへにやかのほたやにてそむまれ給ふくさなきのけんをはくわのえたにかけをき給しをいはとひめこれをと紀大夫か田一よのうちにもりになりたるやしろのすきによせかけてをかれたりけるか夜くけんよりひかり立ければかのひかりすきにもえつきてやけたふれにけり田にすきのやけてたふれ入たりければ田もあつかりけるといふ心にあつたとそ名つきたるやまとたけのみことは白鳥にてとひおち給て神になるいまのあつたの大みやう神是なりいはとひめもあかてわかれしなかなれはすなはち神とあらはれ源大夫もかみとなり紀大夫も同じく神とそあらはれける扱もくさなきのけんをはほうてんをつくりてをかれたりけるか夜くにつるきにひかりたつ知法行とくの人ならては見る事なししかもしんらのみかとしやもん道行といひけるかうそうの日本に立つるきのひかりを見てみか

の白幡二流と見えしなり。尾張国に飛び落ちぬ。そのところをば白鳥塚と名づけたり。幡の落ちたるところをば幡屋とて今にあり。兵衛佐頼朝は末代の源氏の大將となるべきゆへにや、かの幡屋にてぞ生まれ給ふ。草薙剣をば桑の枝に懸け置き給ひしを、岩戸姫これをと、紀大夫が田、一夜のうち森になりたる社の杉に寄せ懸けて置かれたりけるが、夜々剣より光立ちければ、かの光、杉に燃えつきて焼け倒れにけり。田に杉の焼けて倒れ入たりければ、田も熱かりけるといふ心に熱田とぞ名づけたる。日本武尊は白鳥にて飛び落ち給ひて神になる。今の熱田大明神是なり。岩戸姫も飽かで別れし仲なれば、すなはち神と顕れ、源大夫も神となり、紀大夫も同じく神とぞ顕れける。[N]扱も草薙剣をば宝殿を作りて置かれたりけるが、夜々に剣に光立つ。知法行徳の人ならては見る事なし。しかも新羅の帝に沙門道行といひける高僧の日本に立剣の光を見て、帝

とにかたりければなにともしてかの  
つるきをとつてわれにあたへよとおほせ  
ければ扱はとつてまいらせさふらはんと  
て日本にそわたりにけるおはりのあつ  
たにまうてつゝかのつるきを七日をこ  
なふてぬすみとりて五てうのけさに  
つゝんてにけるほとにつるきけさを

(第17紙)

つきやふつてもとのほうてんにかへり入二  
七日をこなふてつるきをとり七てうのけ  
さにつゝんてにけるかつるき又七て  
うをもつきやふりてほうてんにかへり道  
行なを立かへつて三七日をこなひて  
このたひは九てうにつゝんていてける  
あひたけさをやふる事えすしてつく  
しのはかたまてにけかへりたりけるをあ  
つたのみやう神やすからぬ事とおほし  
めしすみよし大明神をうつてにくたし  
道行をけころしてくさなきの剣を  
うはひとるみかといきふとうといふ将  
軍に七の剣をもたせて日本へそわ  
たしけるいきふとうすてにおはりの  
くにまてせめきたるあつたの神宮  
にくきやつかなとてけころし給に

けり

(第18紙)

に語りければ、「何ともしてかの  
剣を取つて我に与へよ」と仰せ  
ければ、「扱は取つて参らせ候はん」と  
て日本にぞ渡りにける。尾張の熱  
田に詣でつゝ、かの剣を七日行  
なふて、盗み取りて五条の袈裟に  
包んで逃げけるほどに、劍袈裟を

突き破つて、もとの宝殿に返り入。二  
七日行ふて剣を取り、七条の袈  
裟に包んで逃げにけるが、劍又七条  
をも突き破りて宝殿に返り、道  
行なを立返つて三七日行ひて、  
この度は九条に包んで出でける  
間、袈裟を破る事を得ずして筑  
紫の博多まで逃げ帰たりけるを、熱  
田明神安からぬ事と思し  
召し、住吉大明神を討手に下し、  
道行を蹴殺して草薙剣を  
奪ひ取る。帝、生不動といふ将  
軍に七つの剣を持たせて、日本へぞ渡  
しける。生不動すでに尾張  
国まで攻め来たる。熱田神宮、  
「憎きやつかな」とて、蹴殺し給にけり。

## 【第18回】

(第19紙)

所持する七の剣をめしとつて草なきのけんくはへてほうてんにいは、れたり今のやつるきの大みやう神とは是なり代々かくこそありしにのちのほうけんもれいけんをとり給はず平家とつてみやこのほかに出て二位とのこしにさしてうみに入上古ならましかはうしなふへきにあらずまつたいこそ心うけれかつきするあまにおほせて是をもとめさせすいれんをめしてたつぬれとも見えすりうしんこれをとつてりうくうへおさめてけりその、ちもきこえざりけり又そのころある人の夢に見けるは草なきの剣は風水龍王やまたのおろちとへんしてそさのおのみことにかいせられもつところの剣をうは、るこの風水龍王はいふき大明神たるによつてふわのせきに大しやとなりてやまとたけのみことの伊勢大神宮よりあまのむらくもの剣を給てとうゐのために下こくし玉ふをせきと、めとらんとし給けるもかなはず御のほりのときまぢまふけてうはいかへさんとし給けるも

所持する七の剣を召し取つて、草薙劍加へて宝殿に祝はれたり。今の八劍大明神とは是なり。○代々かくこそありしに、後の宝劍も靈験劣り給はず。平家取つて都の外に出て、二位殿腰に差して海に入。上古ならましかば失ふべきにあらず。末代こそ心憂けれ。潜きする海人に仰せて、是を求めさせ、水練を召して尋ぬれども見えず。龍神これを取つて龍宮へ納めてけり。その後も聞こえざりけり。又その頃ある人の夢に見けるは、草薙劍は風水龍王八岐大蛇と変じて素戔鳴尊に害せられ、持つところの剣を奪はる。この風水龍王は伊吹大明神たるによつて、不破関に大蛇となりて、日本武尊の伊勢大神宮より天村雲劍を給て、東夷のために下国し玉ふをせき留め取らんとし給ひけるも叶はず、御上りの時待ちまふけて奪ひ返さんとし給ひけるも

ころされけりいきふとう八さいのすへ  
らきとあらはれてもとの劍はかなはね  
ともものちのほうけんをとりもちて  
さいかいのなみのそこにそしつみ玉ひ  
けるつゐにりうしんにおさめられぬ  
れはたやすく見えしとそきこえける  
さて九郎大夫の判官よしつねは平  
しのいけとりともあひくしてくわんと  
うへけかうありけるかちはら平三かけ  
むけんによつてこしこえにせきをすへ  
てそれよりかまくらへはいれられすはう  
くわんほんいなき事におもはれ色く

(第20紙)

のことをかきしるしてたひくまいらせら  
るゝといへとももちぬすしてそののち  
みやこにのほりける時はこねのこ  
むけんにまいりてきやうたいの中  
いかにもしゆんしゆくするやうにとて  
うすみとりの劍をまいらせらるその  
のちとさはう正そんみやこにのほり  
たはかりうたんとしけれとも判官  
心えておはしければつゐにはうちそん  
してくらまのおくそう正かたに、  
こもりたりけるをくらまほうしむかしの  
よしみありければすなはちからめ  
とつてはう官にたてまつるかき

殺されけり。生不動八歳のすべ  
らきと現れて、もとの劍は叶はね  
ども、後の宝劍を取り持ちて  
西海の波の底にぞ沈み玉ひ  
ける。つゐに龍神に納められぬ  
れば、たやすく見えしとぞ聞こえける。  
〔P〕さて、九郎大夫判官義経は平  
氏の生け捕りども相具して、関東  
へ下向ありけるが、梶原平三が讒  
言によつて腰越に関をすへ  
て、それより鎌倉へは入れられず。判  
官本意なき事に思はれ、色々

のことを書き記して、度々参らせら  
るゝといへども用ゐずして、その後  
都に上りける時、箱根権  
現に参りて、兄弟の中  
いかにも純熟するやうにとて、  
薄緑の劍を参らせらる。その  
後、土佐房正尊都に上り  
謀り討たんとしけれども、判官  
心得ておはしければ、つゐには討ち損  
じて、鞍馬の奥僧正谷に  
籠りたりけるを、鞍馬法師、昔の  
よしみありければ、搦め  
取つて判官に奉る。務

のせうともくに、おほせて六てう  
 にしのしゆしやかにてちうせられけり  
 くはんとうよりかさねてうつて上らく  
 のよしきこえければよしつね五百よ  
 きをめしくしてさいかいにおもむき  
 たまへともつのくに大もつのうら  
 をすきてあくふうにおとされてあ  
 またのふねともふきちらされつるに  
 しつかといふしらひやうしをめしくして  
 よし野山に入その、ちほくろくたう  
 にか、りあふしうにくたりひてひら入  
 たうをたのみて二三年ありて文治四  
 年四月廿九日五百よきにてせめける  
 にはうくわんやすひらにむかつていくさ  
 してともためとて女はう廿二わかきみ  
 四さいとうさい子のひめきみわか身三十  
 一と申けるにほんいをもとけすして  
 つゐにしかいしてこそうせにけれ中も  
 なをらぬものゆへにつるきをこんけん  
 にまいらせけるもうんのきはめとぞ  
 おほえける建久四年五月廿八日の夜  
 さかみのくにそかの十郎すけなりおな  
 じき五郎時むねかおやのかたきすけ  
 つねをうちけるときはこねのへつたう  
 きやうしつか手よりひやうこくさりの

(第21紙)

丞知国に仰せて、六条  
 西の朱雀にて誅せられけり。  
 関東より重ねて討手上洛  
 の由聞こえければ、義経五百余  
 騎を召し具して西海に赴き  
 給へども、津国大物浦  
 を過ぎて悪風におどされて、あ  
 またの船ども吹き散らされて、つるに  
 静といふ白拍子を召し具して  
 吉野山に入。その後、北陸道  
 にか、り、奥州に下り、秀衡入  
 道を頼みて二、三年ありて、文治四  
 年四月二十九日、五百余騎にて攻めける  
 に、判官は泰衡に向つて軍  
 して、朝為とて女房二十二、若君  
 四歳、当歳の子の姫君、我が身三十  
 一と申けるに本意をも遂げずして、  
 つゐに自害してこそ失せにけれ。中も  
 直らぬものゆへに、剣を権現  
 に参らせけるも運のきはめとぞ  
 覚えける。建久四年五月廿八日の夜、  
 相模国曾我十郎祐成、同  
 じき五郎時宗が、親の敵祐  
 経を討ちける時、箱根の別当  
 行実が手より、兵庫鑓の

太刀をえたりければおもふやうにかたきをそうつたりけるこのたちは九郎はうくはんのこんけんにまいらせたりしうすみとりといふつるきむかしのひさまるこれなりおやのかたきころのまゝにうつて日本五畿七たうにきこえあげ上下万人にほめられけるもこのつるきのゐとくとてきこえけるその後かのひさまるかまくら殿にめされけりひさきりひさまる一具にて多田の満仲八まん大ほさつより給つて源氏ちう代のつるきなればしはらく中絶すといへともつるには一所にあつまる事きたいのふしき天下おさまるへきゆへとかや

(第22紙)

【第19図】

(第23紙)

太刀を得たりければ、思ふやうに敵をぞ討つたりける。この太刀は九郎判官の権現に参らせたりし薄緑といふ剣、昔の膝丸これなり。親の敵心のまゝに討つて、日本五畿七道に聞こえ上げ、上下万人にほめられけるも、この剣の威徳とて聞こえける。その後、かの膝丸鎌倉殿に召されけり。鬚切、膝丸、一具にて多田満仲八幡大菩薩より給つて、源氏重代の剣なれば、しはらく中絶すといへども、つるには一所に集まる事、希代の不思議、天下治まるべきゆへとかや。

- (※1) なされ、十八にて南都の衆徒を防ぎし恩忠に兵衛尉に
- (※2) 長文のためここでは省略。解題二四・二五頁参照。
- (※3) 御宝すなわち宝剣これなり。

二〇二五年 八月三十一日 受付

二〇二五年 一月一七日 採択決定



図2 国会本第2図



図1 国会本第1図



図4 国会本第4図



図3 国会本第3図



図6 国会本第6図

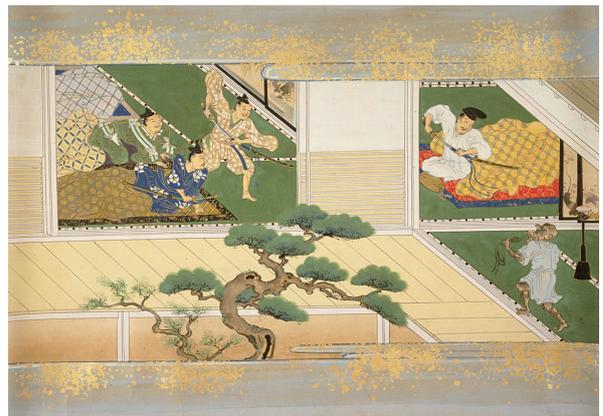


図5 国会本第5図



图8 国会本第8图



图7 国会本第7图



图9 国会本第9图



图10 国会本第10图



図12 国会本第12図

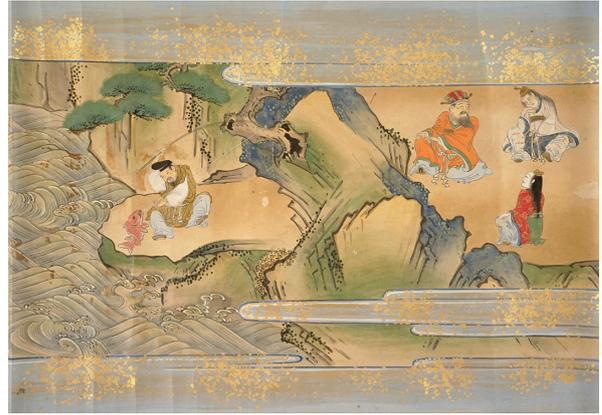


図11 国会本第11図



図13 国会本第13図



図14 国会本第14図

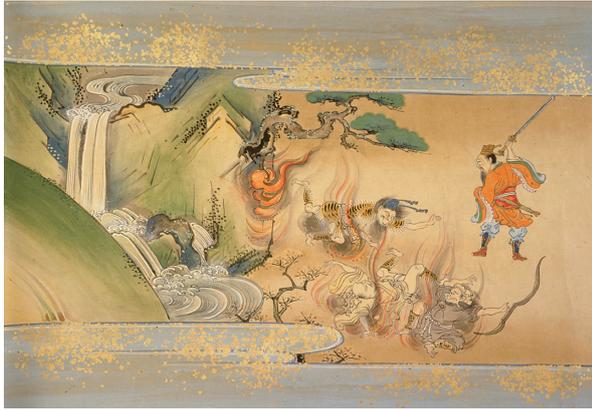


图 16 国会本第 16 图



图 15 国会本第 15 图



图 18 国会本第 18 图



图 17 国会本第 17 图



图 19 国会本第 19 图

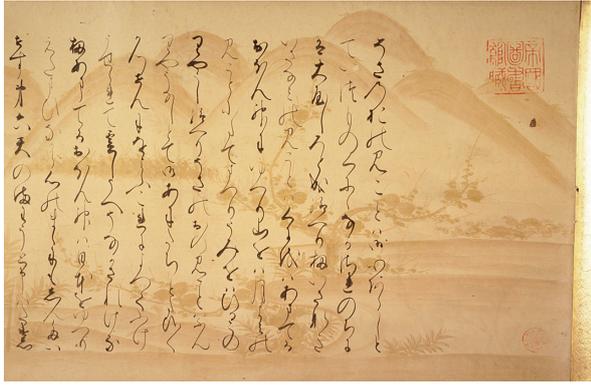


図 21 国会本第三軸第 1 紙

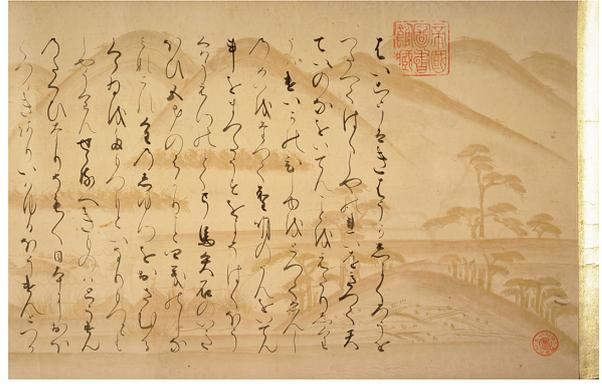


図 20 国会本第一軸第 1 紙

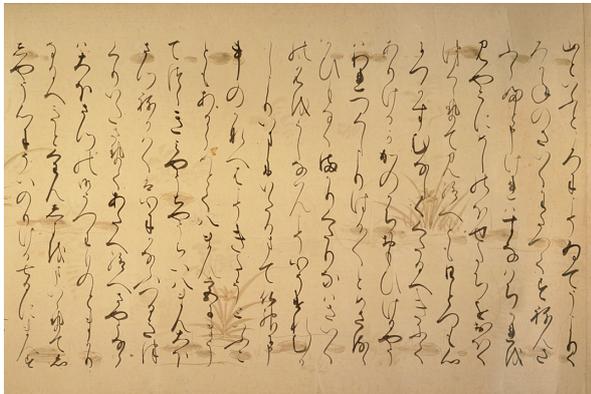


図 23 国会本第一軸第 2 紙

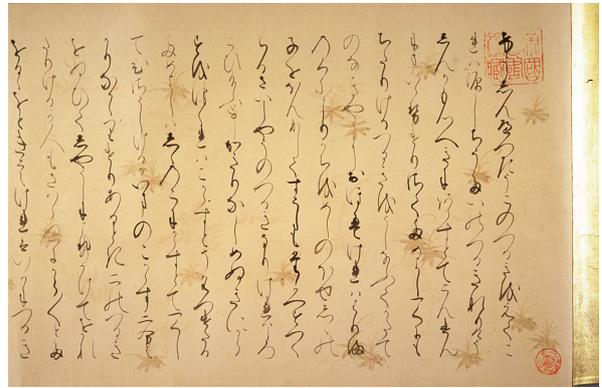


図 22 国会本第二軸第 1 紙

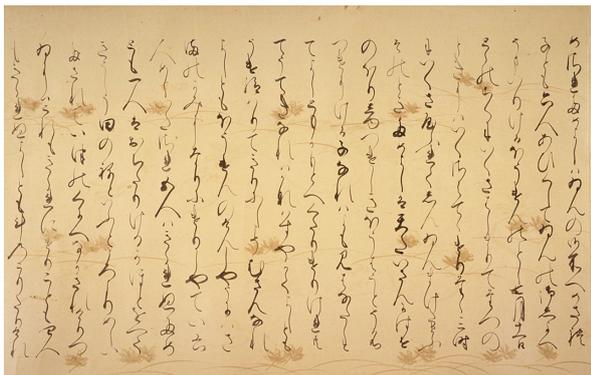


図 25 国会本第二軸第 2 紙

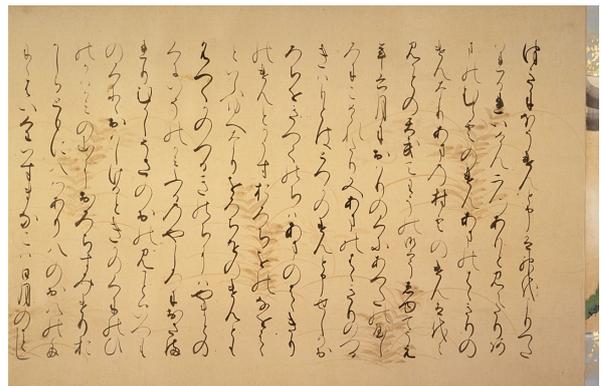


図 24 国会本第三軸第 4 紙  
※第 2 紙が短いため第 4 紙を掲載

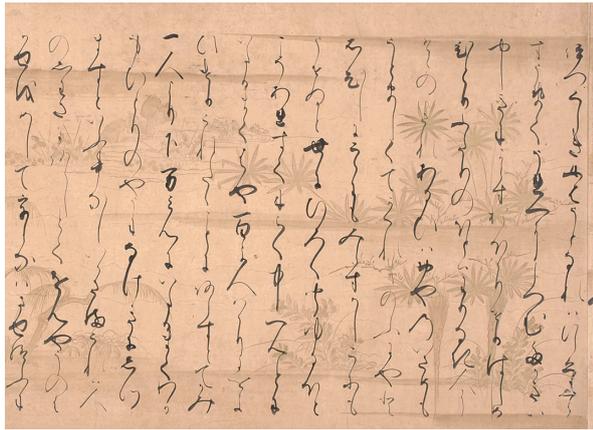


図 27 『羅生門物語』 第一軸第 2 紙

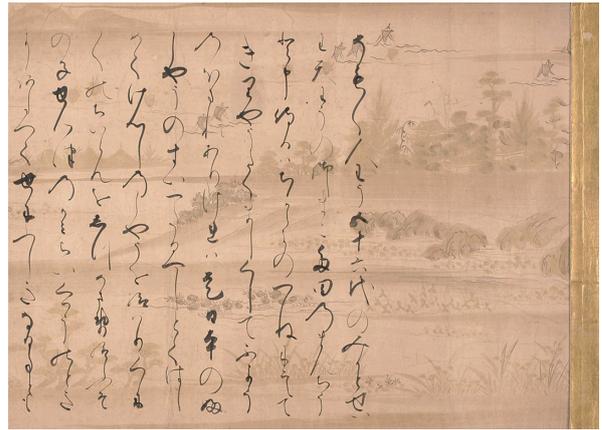


図 26 『羅生門物語』 第一軸第 1 紙

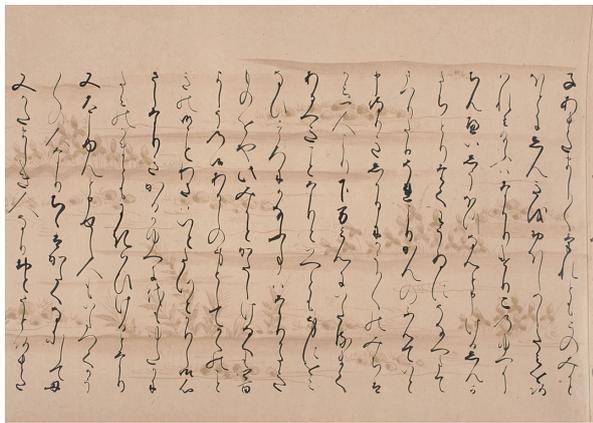


図 29 『大黒舞』 第一紙第 2 紙

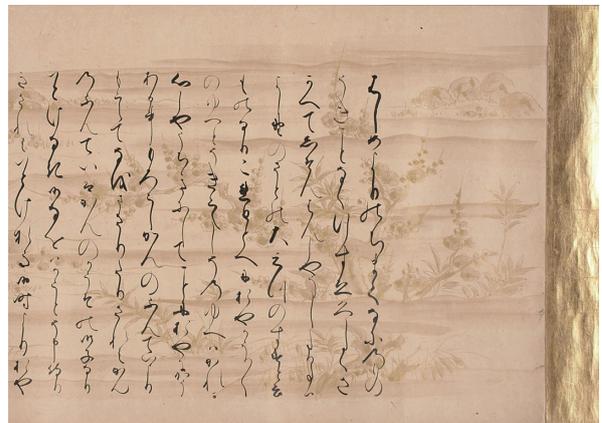


図 28 『大黒舞』 第一軸第 1 紙

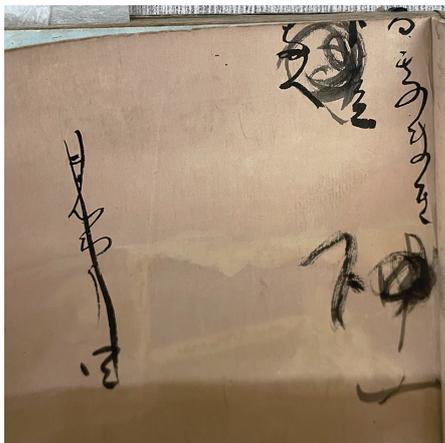


図 31 東大本第 1 図裏面  
※筆者による撮影

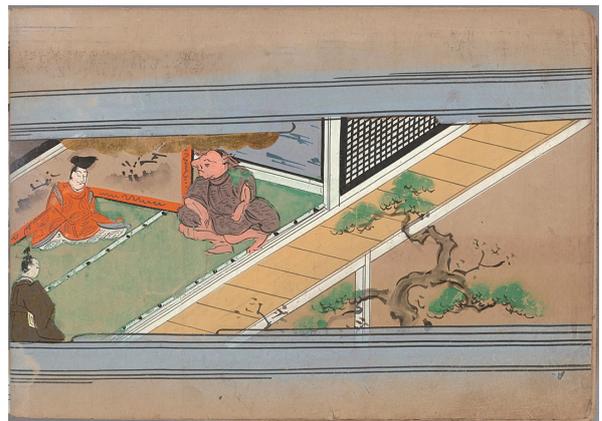


図 30 東大本第 1 図

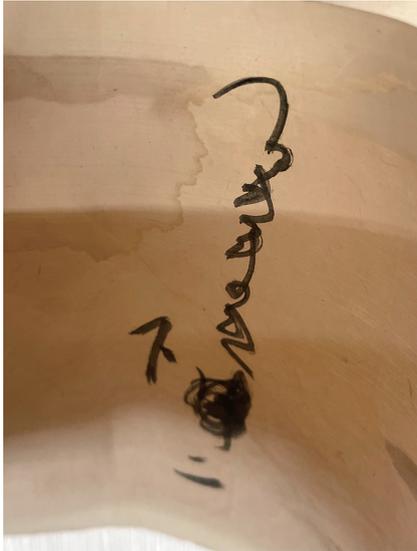


図33 東大本第2図裏面  
※筆者による撮影



図32 東大本第2図

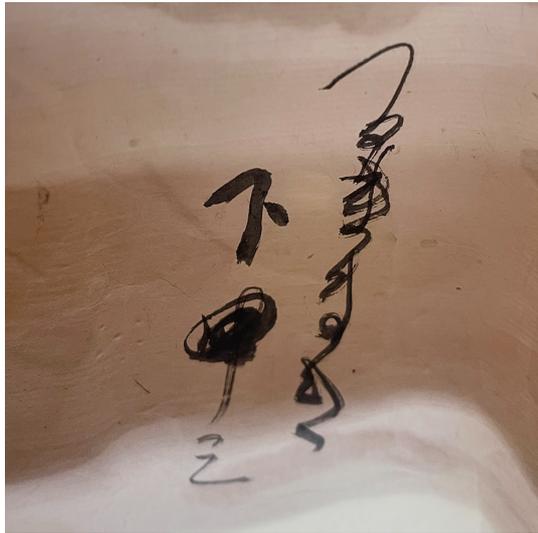


図35 東大本第3図裏面  
※筆者による撮影



図34 東大本第3図

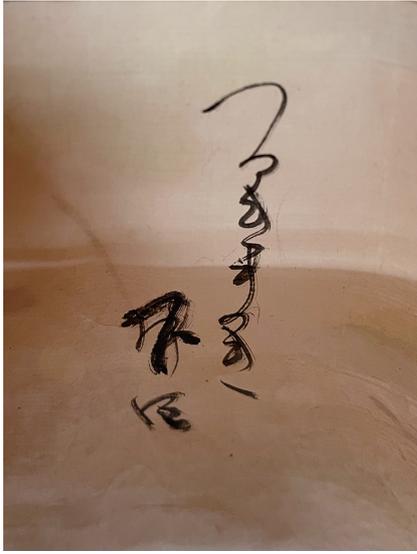


図 37 東大本第 4 図裏面  
※筆者による撮影



図 36 東大本第 4 図

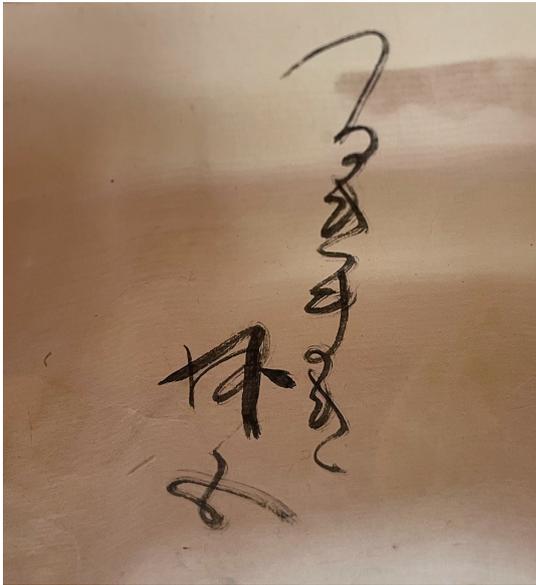


図 39 東大本第 5 図裏面  
※筆者による撮影



図 38 東大本第 5 図

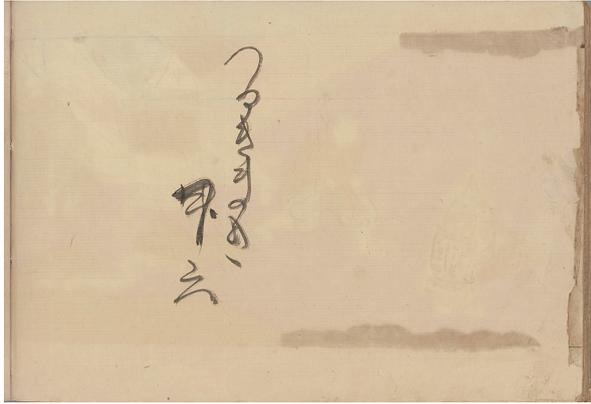


图 41 東大本第 6 図裏面



图 40 東大本第 6 図



图 43 元禄十年版第 3 图



图 42 元禄十年版第 2 图